

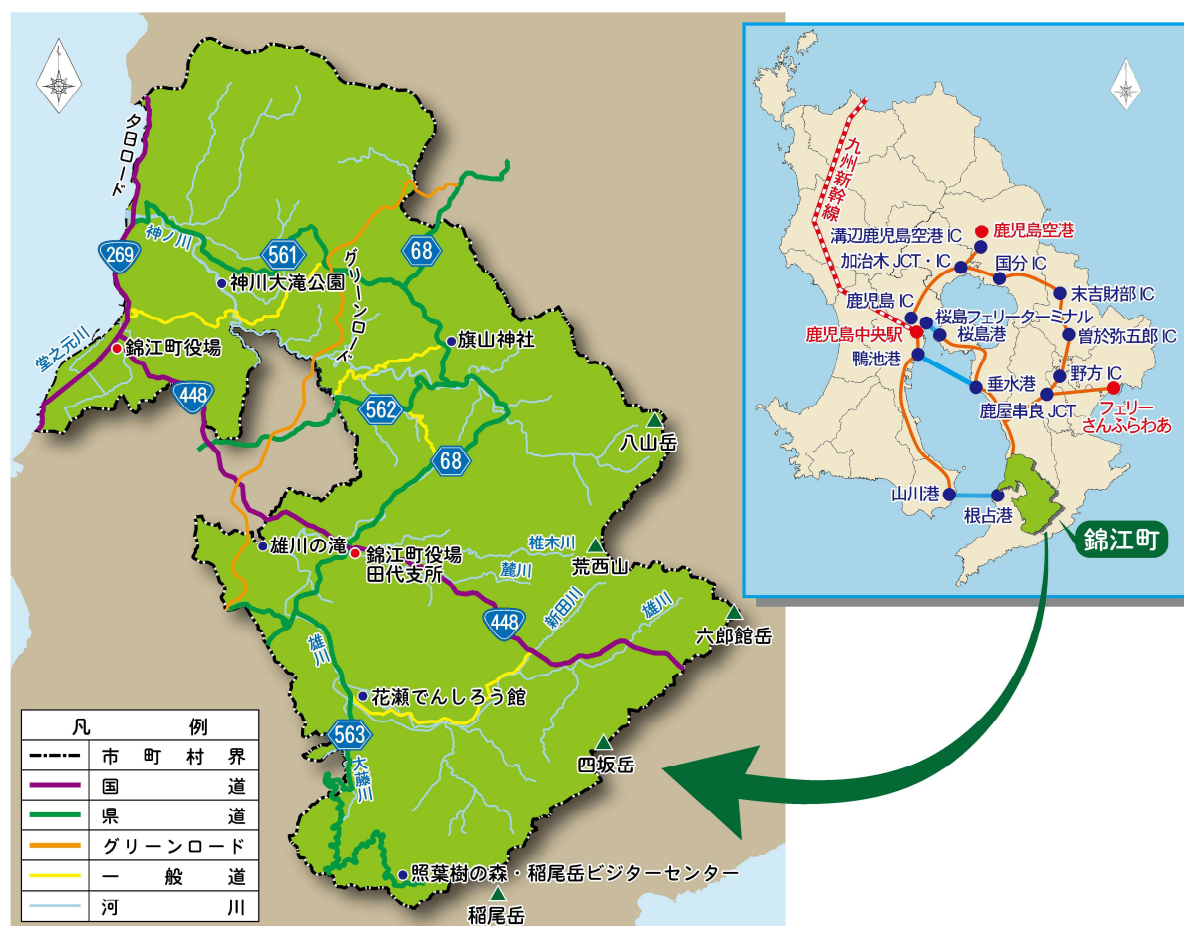
## 第2章 地域内の環境評価に関する事項

### 第1節 錦江町の概要

#### 1. 位置・地勢

本町は、大隅半島の中南部に位置し、東串良町、南大隅町、肝付町の4町からなる肝属郡に属します。2005年に旧大根占町と旧田代町が合併し錦江町となりました。町名は、町の西側に広がる錦江湾（鹿児島湾）に由来します。東側は肝属山地、西側は錦江湾（鹿児島湾）に面しています。西には錦江湾（鹿児島湾）を挟んで薩摩半島、南には九州本島最南端に位置し、360度パノラマで景色を眺めることができる佐多岬（南大隅町）があります。面積は全町で163.19k㎡（県内43市町村中第20位）で、県全体の1.8%、郡全体の22.9%を占めます。

図 2.1 錦江町広域図



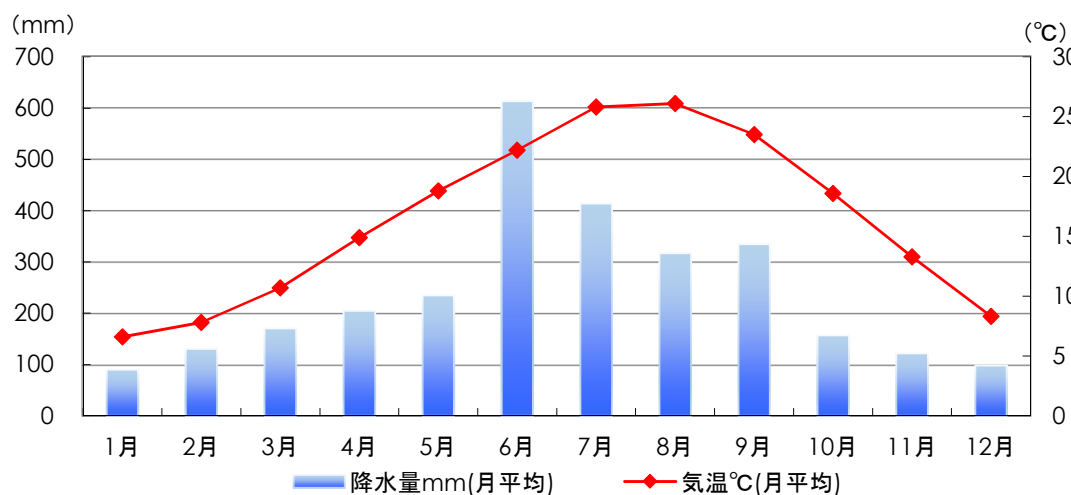
## 2. 気象

大隅海峡を流れる黒潮の影響を受け、高温多湿の気候条件にある一方、沿岸部と内陸部では大きな標高差があり、南国的な気候（無霜地帯）の海浜地域から、積雪が見られる内陸部の山間地域まで存在します。気象庁の統計データでみると年間平均気温が16.4℃、年間降水量は2,880mmで、5月の梅雨時期から夏の終わりの9月にかけて多く、梅雨前線が活発となる6月の降水量が最も多くなっています。また、台風の経路になることが多く、8月～9月の雨量も多くなっています。

表 2.1 気象データ（年・月ごとの平年値）

項目	降水量	平均気温	日最高気温	日最低気温	平均風速	日照時間
	(mm)	(℃)	(℃)	(℃)	(m/s)	(時間)
統計期間	1991～2020	1991～2020	1991～2020	1991～2020	1991～2020	1991～2020
資料年数	30	30	30	30	30	30
1月	90.1	6.6	11.6	1.4	1.9	116.6
2月	130.8	7.8	13.0	2.2	1.9	125.0
3月	170.5	10.7	16.0	5.2	2.0	154.6
4月	205.1	14.9	20.3	9.2	1.9	168.9
5月	235.0	18.8	24.1	13.7	1.7	166.3
6月	613.6	22.2	26.3	18.6	1.6	95.6
7月	413.9	25.8	30.1	22.2	1.7	179.1
8月	317.2	26.1	30.8	22.4	1.7	187.9
9月	334.9	23.5	28.6	19.5	1.5	152.2
10月	157.0	18.6	24.2	13.7	1.3	168.2
11月	121.9	13.3	19.0	7.9	1.3	145.6
12月	98.2	8.3	13.8	2.9	1.7	126.5
平均	240.7	16.4	21.5	11.6	1.7	148.9

出典：気象庁電子閲覧室（田代観測所）「年・月ごとの平年値」より



※降水量：過去30年間の月ごとの平年値，気温：過去21年間の月ごとの平年値で整理。



### 3. 主要交通網

本町は、大隅半島の中南部に位置し、鹿児島市・鹿児島空港まで約2時間、鹿屋市まで約30分を要する位置にあり、地理的に不利な条件下にあるものの、平成26年度に東九州自動車道・大隅縦貫道が鹿屋市まで延伸されたこと、国・県道などの整備が進んだことなど、従来よりも交通環境は改善されつつあります。今後は、大隅縦貫道の笠之原IC以南の早期整備、高速道路網へのアクセス道路の整備を国・県に積極的に要請を図る必要があります。

### 4. 土地利用

本町の総面積は、16,319haで、そのうち林野面積12,224ha、経営耕地面積926ha（耕地率5.7%）となっています。経営耕地面積のうち、水稻が175haと一番多く、次いで、さつまいも（焼酎用）147ha、ばれいしょ53ha、だいこん43ha、さやいんげん43haを中心に耕地利用されています。農林業センサスによると1経営体当たりの経営耕地面積は2.4haとなっており、限られた耕地と地形条件を活かし、多様な農作物が生産されています。

出典：作物面積は大隅地域の農業（令和6年度）農業生産実績

表 2.2 市町村別耕地面積

項目	総面積 (ha)	経営耕地面積 (ha)	水田 (ha)	畑 (ha)	樹園地 (ha)
錦江町	16,319	926	194	577	155
鹿児島県	918,708	70,338	19,957	41,260	9,121

出典：2020年農林業センサス



## 第2節 錦江町の社会環境

### 1. 人口構造の動向と見直し

#### (1) 人口・世帯数の推移

本町の人口は昭和40年の19,726人（グラフ外）以降減少し続けています。令和2年には6,944人となりピーク時から65%減少しています。また、平成27年から令和2年までの増減率は、年△12.4%となっています。世帯数については、平成17年から令和2年にかけて年々減少しており、この15年間で908世帯が減少しています。また、単身世帯数は平成27年から令和2年にかけて増加しており、令和2年度の単身割合は39%と平成17年度と比較すると7%高くなっており、単身高齢者の増加や若者の一人暮らしが考えられます。

表 2.3 人口・世帯数の推移

単位：人口(人)・世帯(数)

区分	市町村名	実 数				増減率(%)		
		平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	H17～ H22	H22～ H27	H27～ R2
人口	錦江町	10,015	8,987	7,923	6,944	△10.3	△11.8	△12.4
	鹿児島県	1,753,179	1,706,242	1,648,177	1,588,256	△2.7	△3.4	△3.6
世帯数	錦江町	4,083	3,804	3,442	3,175	△6.8	△9.5	△7.8
	鹿児島県	722,937	729,386	724,690	728,179	0.9	△0.6	0.5

出典：国勢調査

表 2.4 世帯数の推移

単位：世帯(数)

区分	市町村名	実 数				増減率(%)		
		平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	H17～ H22	H22～ H27	H27～ R2
世帯 核 家族	錦江町	2,498	2,302	2,058	1,800	△7.8	△10.6	△12.5
	鹿児島県	444,204	437,344	422,956	406,396	△1.5	△3.3	△3.9
世帯 単 数独	錦江町	1,173	1,139	1,110	1,172	△2.9	△2.5	5.6
	鹿児島県	228,495	243,096	257,593	282,664	6.4	6.0	9.7

出典：国勢調査



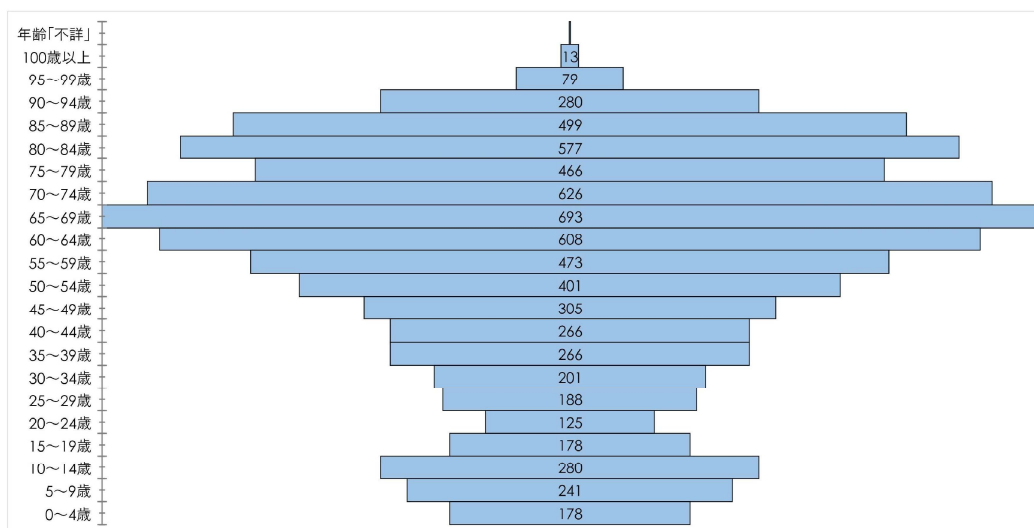
## (2) 人口の年齢構造

本町における令和2年度の65歳以上の老年人口割合は47%となっており、鹿児島県や奄美群島と比較しても高い割合となっています。15歳未満の割合は、他地域と比較しても大きな差はありませんが、生産年齢人口で低くなっています。

平成17年（2005年）から令和2年（2020年）までの年齢階級別人口の推移を見ると、全ての区分で減少傾向にあります。区分毎に見ると、15～64歳の生産年齢人口では減少幅が大きくなっており、高校入学や卒業後の進学、就職に伴う町外への転出によるものだと考えられます。また、15歳未満についても減少し続けており、65歳以上の老年人口では、ほぼ横ばいです。

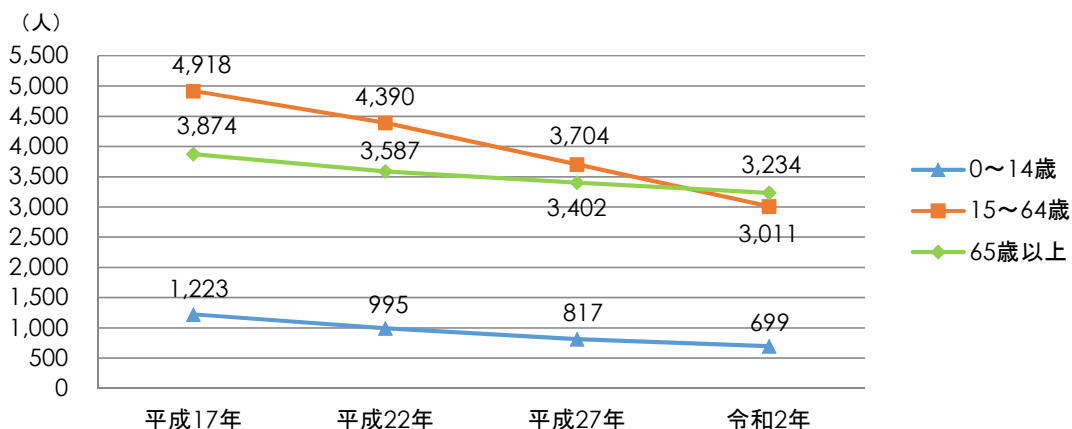
近年の自然動態では、死亡数が出生数を上回る「自然減」で社会動態では、転出数が転入数を上回る「社会減」となっており、人口減少の大きな要因となっています。

図 2.2 錦江町人口割合（5歳階級別人口）



出典：令和2年国勢調査

図 2.3 錦江町人口推移（年齢階級別）



出典：令和2年国勢調査

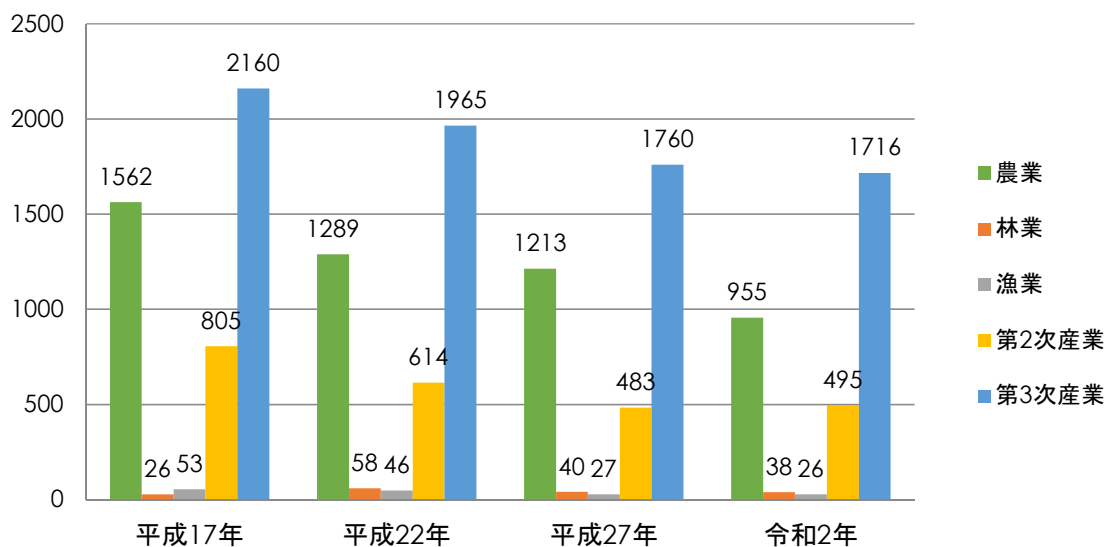


## 2. 経済産業構造と動向

### (1) 産業構造

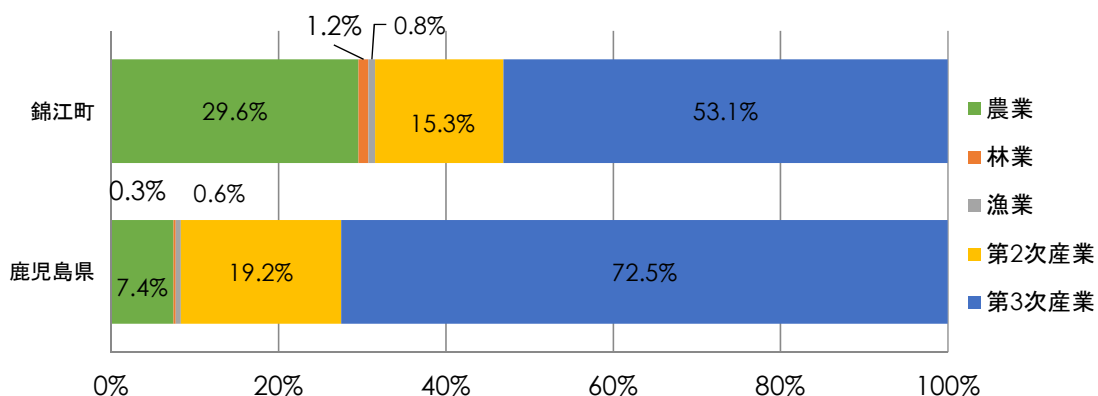
産業別人口の推移をみると、就業者数は人口減少とともに減少しています。平成17年から令和2年までの15年で、農業は39%、第二次産業39%、第三次産業21%減少し、林業及び漁業は横ばいの状況です。

図 2.4 錦江町産業別人口推移



出典：令和2年国勢調査

図 2.5 錦江町産業分類割合（令和2年）



出典：令和2年国勢調査



表 2.5 町内総生産額の推移

単位：百万円，%

区分	産業分類	実数			H30を100とした指数	
		平成30年	令和2年	令和4年	R2	R4
錦江町	総生産	26,272	25,194	25,001	95.9	95.2
	第一次産業	4,581	5,189	5,399	113.3	117.9
	第二次産業	4,035	3,735	3,206	92.6	79.5
	第三次産業	17,451	16,104	16,092	92.3	92.2
鹿児島県	総生産	5,871,013	5,596,336	6,048,596	95.3	103.0
	第一次産業	260,721	272,918	288,993	104.7	110.8
	第二次産業	1,272,890	1,203,441	1,405,449	94.5	110.4
	第三次産業	4,291,506	4,082,889	4,280,522	95.1	99.7

出典：市町村民所得推計 統計表第2表（市町村内総生産）統計分（鹿児島県HP）

## (2) 農林水産業の現状

本町の基幹産業である農林は、年間約120億円の農業産出額を誇ります。海岸沿線では「ばれいしょ」「ブロッコリー」「ネギ」「キャベツ」、中間台地では「茶」「さつまいも」「加工用大根」「高菜」、山間地域では「早期水稻」「茶」「さつまいも」「かぼちゃ」などの土地利用型農業が盛んです。畜産部門では「肉用牛」「養豚」「ブロイラー」が盛んで、農業産出額の66%（令和5年度生産実績）を占めます。

林業は、木材需要の高まりにより主伐が増加していますが、後継者不足や所有者の意欲の低下により適切な更新が進んでいない森林も見られます。町の面積の78%を占める森林は、土壌保全や水源保全、多様な動植物の生息地として重要な役割を果たしています。地球温暖化や異常気象の影響で森林の破壊や土砂崩れのリスクが高まっています。

水産業は、鹿児島湾の豊かな水産資源を活かした養殖業が盛んです。

一方、異常気象による気温上昇や降雨・干ばつの増加が農地管理や水資源確保に影響しています。また、農業分野においては、担い手不足や生産資源の高騰、農家の高齢化により遊休農地が増加しています。林業分野では、森林の多面的機能の低下が懸念されています。

出典：第3次錦江町総合振興計画





【キャベツ】



【ばれいしょ】



【スナップエンドウ】



【さやいんげん】



【ミニトマト】



【茶】



【水 稲】



【飼料作物】



### 3. 生活環境整備

#### (1) 道路

町道は、改良舗装事業、維持補修事業の整備が進められてきておりますが、今後とも、町民の日常生活や経済活動の基盤として、引続き計画的な維持・改良を推進し、災害に強い道路整備を行う必要があります。

災害時の緊急輸送を円滑に行うため、東九州自動車道をはじめ、大隅縦貫道、国道269号等の緊急輸送道路の整備を確保する必要があります。

出典：錦江町地域強靱化計画

#### (2) 水道・生活排水施設

本町は、これまで水道水の安定供給・確保のため、施設整備や維持管理に取り組むとともに、漏水防止のため、配水管の漏水調査や配水管の修繕に取り組んでいます。また、町水道ではない集落水を確保している自治会は、小規模で高齢化が進んでいる組織が多く、人口減少により施設の維持管理に苦慮しているほか、施設の改修には多額の費用を要しています。災害時において水道施設が被災した場合、住民生活や社会活動に必要な水の供給に支障を来す恐れがあることから、水道施設における被害の発生を抑制し影響を小さくするため、水道施設の耐震化を推進する必要があります。

生活排水については、農業集落排水事業、合併処理浄化槽設置補助に取り組み、汚水処理水洗化に取り組んでいます。鹿児島県が策定する鹿児島湾ブルー計画に掲げる「美しい錦江湾を明日の世代へ」を基本理念に、将来にわたって良好な水質を保つため、排水の適正処理と水環境の維持が求められています。

最重点事項として、住居の立地条件を勘案しながら、農業集落排水施設の計画的な維持管理を行い、今後も汚水処理水洗化率向上のため、合併処理浄化槽設置補助に引き続き取り組む必要があります。

出典：錦江町地域強靱化計画



【下水処理施設】



【マンホール鉄蓋（たしろでんしろ）】



## 4. 芸術・文化

本町は、これまで、錦江町文化協会などの各種団体と音楽・舞台芸術など幅広い文化芸術の振興に取り組んできました。高齢化が進むなかにおいても、町民の学びの意欲は大きく、ニーズにあった公民館講座なども開催され活動は盛んですが、今後も錦江町の個性と魅力に磨きをかけるため、文化芸術をよりいっそう振興することが必要です。また、錦江町には町の指定文化財をはじめ貴重な文化財が多数あり、それらを保存し町民の誇りとして未来に引き継ぐことも求められています。

### (1) 指定文化財

本町には、1件の国指定文化財、3件の県指定文化財、33件の町指定文化財があります。こうした文化財を貴重な国民的財産として保護し、郷土の自然と歴史を後世に伝えるとともに、農村環境と密着した身近な文化財の活用を図っていくことも必要となってきます。

表 2.6 国指定文化財

NO	名 称	指定年月日	指定区分	所在地
1	稲尾岳	S42.7.6	天然記念物	肝属郡南大隅町・錦江町・肝付町

出典：国指定文化財等データベース

表 2.7 県指定文化財

NO	名 称	指定年月日	指定区分	所在地
1	山ノ口遺跡出土品	H27.4.17	有形文化財	城元 918 番地
2	大根占町天神下の笠塔婆	H 7.4.12	有形文化財	城元 483-1
3	花瀬の石畳	H27.4.17	天然記念物	田代川原地内

出典：鹿児島県教育委員会(令和6年5月7日)



表 2.8 町指定文化財

## 記念物

NO	名称	指定年月日	指定区分	所在地
1	山之口祭祀遺跡	S47.4.1	記念物（史跡）	山之口
2	河上神社の宝塔	S47.4.1	記念物（史跡）	城元宮脇
3	高城城跡空堀の一部	S47.4.1	記念物（史跡）	神川高城
4	城ヶ崎の板碑	S47.4.1	記念物（史跡）	神川鳥浜
5	洲之上神社の古石塔群	S47.4.1	記念物（史跡）	神川上
6	大根占電信局跡	S47.4.1	記念物（史跡）	神之浜二区
7	鳥浜隋道	S49.11.22	記念物（史跡）	神川城
8	城元新溝碑	S49.11.22	記念物（史跡）	城元宮脇
9	遊喜浦の板碑	S49.11.22	記念物（史跡）	城元遊喜浦
10	宝光寺跡	S50.12.23	記念物（史跡）	城ヶ迫
11	お茶亭跡	S50.12.23	記念物（史跡）	花瀬
12	岩崎遺跡	S50.12.23	記念物（史跡）	岩崎
13	磨崖仏	S59.5.15	記念物（史跡）	岩崎
14	愛宕山の岩屋	S59.5.15	記念物（史跡）	橋ノ口
15	岩屋観音	S59.5.15	記念物（史跡）	平石
16	五輪塔板碑	S59.5.15	記念物（史跡）	上柴立
17	岩屋観音	S59.5.15	記念物（史跡）	中村
18	旗山神社の大楠	S47.4.1	記念物（天然）	城元川南
19	ヒゼンマユミ	S47.4.1	記念物（天然）	神川上
20	鳥浜海岸	S49.11.22	記念物（天然）	神川鳥浜
21	かわごろも	S50.12.23	記念物（天然）	花瀬川
22	大牟礼峠自然林	S54.3.7	記念物（天然）	大牟礼
23	近津神社の社叢群	S54.3.7	記念物（天然）	鶴戸野
24	若宮神社の社叢群	S54.3.7	記念物（天然）	上柴立

## 有形文化財 ※（工：工芸品 考：考古学 古：古文書）

NO	名称	指定年月日	指定区分	所在地
1	若宮神社神楽面	S50.12.23	有形文化財（工）	上柴立
2	田代椀	S50.12.23	有形文化財（工）	西大原
3	岩下門の名寄帳	S47.4.1	有形文化財（古）	神川上
4	大根占名勝誌	S47.4.1	有形文化財（古）	教育委員会

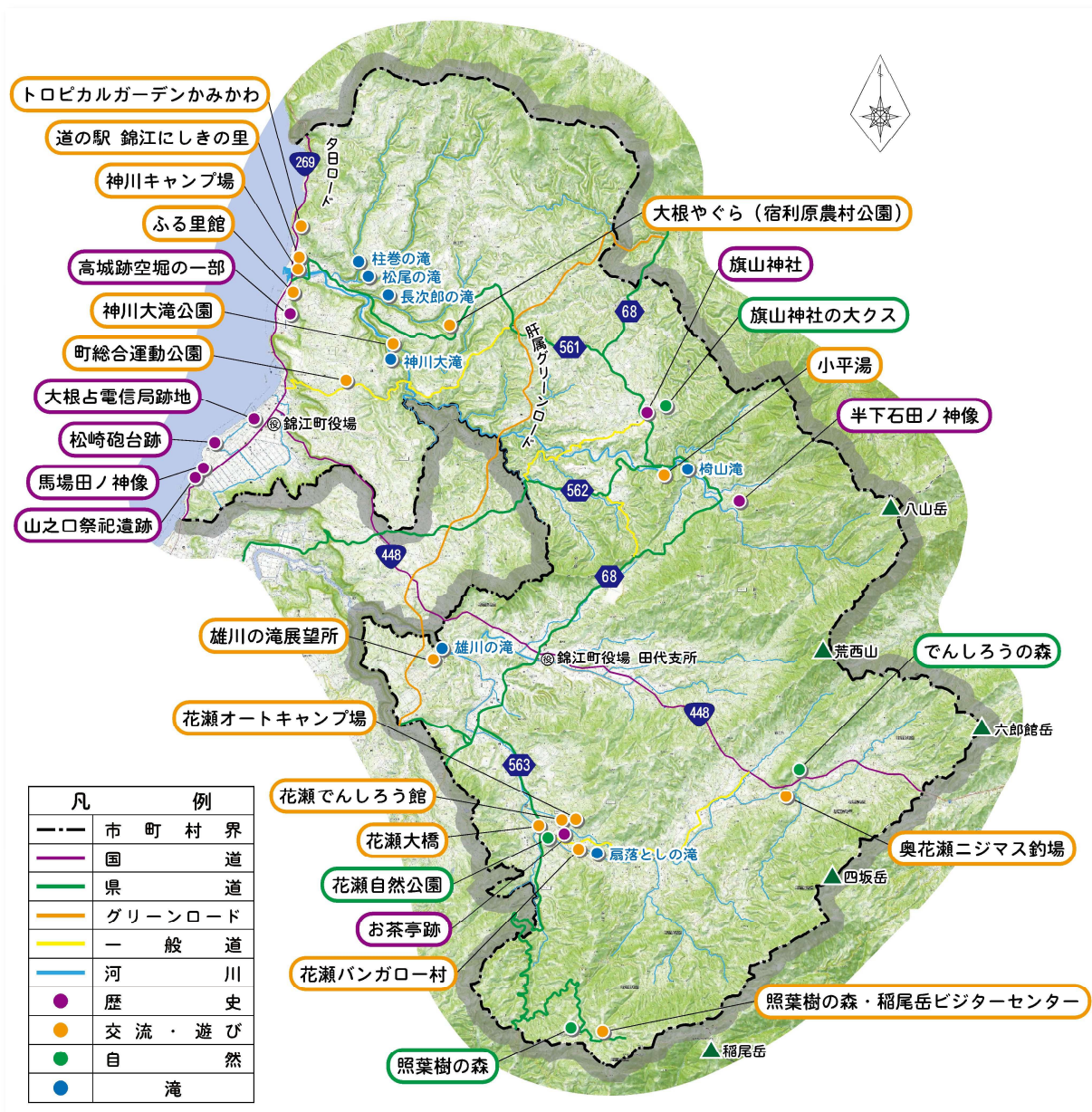
## 有形民俗文化財

NO	名称	指定年月日	指定区分	所在地
1	城元田之神像	S49.11.22	有形民俗文化財	城元中鳥居
2	神川田之神像	S49.11.22	有形民俗文化財	神川上
3	半下石田之神像	S49.11.22	有形民俗文化財	馬場半下石
4	馬場田之神像	S56.9.25	有形民俗文化財	馬場木原
5	田之神像	S58.2.16	有形民俗文化財	東中郡

出典：錦江町 HP



図 2.6 地域資源マップ



出典：錦江町 HP, 上位計画 一部加工



## 第3節 錦江町の生産環境

### 1. 農業・農村の動向

#### (1) 基本方針

第3次錦江町総合振興計画において、町の将来像を支える5つの政策の柱に『働く世代の元気～まちを引っ張る産業の振興～』が掲げられ、それらを達成するための取り組みべき事項として「一次産業を中心とした稼げる環境づくり」「多様な稼ぎ方が生まれる環境づくり」「働く」を支える環境づくり」「経済を地域内で循環させる仕組みづくり」を設定しています。

錦江町の農業を取り巻く情勢は、担い手不足、農畜産物価格の低迷や生産資材の高騰などによる農業所得の減少に加え、持続可能な農業生産、環境と調和した持続可能な農業の推進（SDGs）への取り組み、農地中間管理事業の推進、スマート農業の実装に向けた新技術の開発・普及など、国の農業政策が大きく転換していることから、農業を基幹産業とする本町の経済や産業に多大な影響を及ぼすものと考えられます。

このような状況において、農業の生産性を向上させるために、農業のIoT化、AI活用、作業軽減化、有利販売に向けての販路開拓、マーケティング能力の向上を目指します。さらに、地域農業の継続のため、法人化、新規就農者の確保を目指します。

#### (2) 農家数

本町における令和2年の総農家数は、739戸（対平成17年比54.3%に減少）で販売農家は387戸（構成比52.4%）、自給的農家は352戸（構成比47.6%）となっています。特に販売農家数は平成17年の776戸と比較して、令和2年には387戸となりこの15年間で389戸（49.9%）と大きく減少しています。

販売農家と自給的農家の構成比差は少なく、その理由として、農業従事者の高齢化と後継者不足による販売農家の減少が考えられます。また、耕作放棄地も年々増加しており、イノシシやサル、シカ等の有害鳥獣による農作物の被害が年々深刻さを増しています。

表 2.9 農家数（令和2年：2020年）

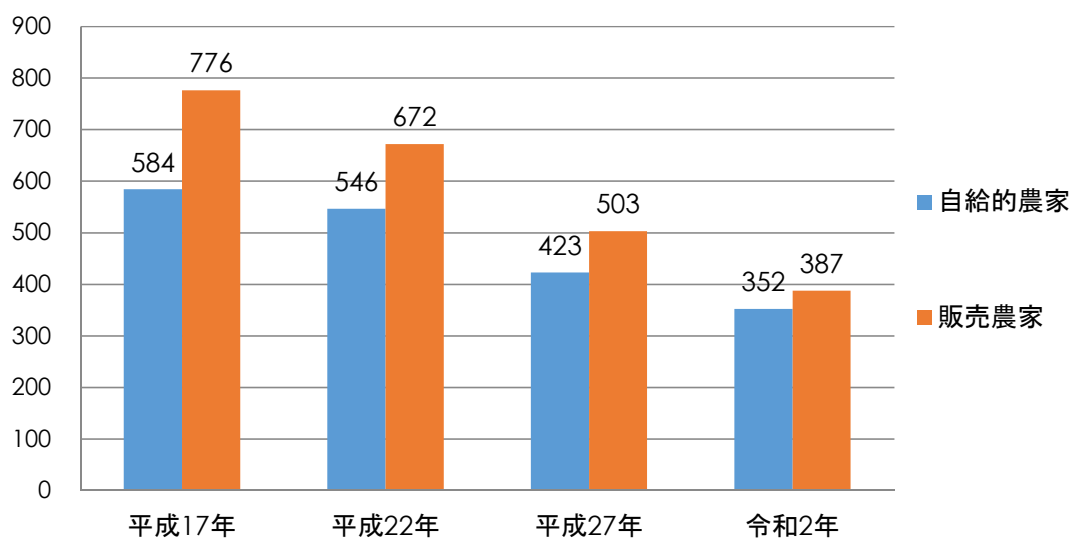
単位：戸，%

項目	2020年（R2）単位：戸			構成比（%）	
	総農家	自給的農家数	販売農家	自給的農家	販売農家
錦江町	739	352	387	47.6	52.4
鹿児島県	48,360	20,161	28,199	41.7	58.3

出典：2020年農林業センサス



図 2.7 事業種別農家数推移（令和2年：2020年）



出典：農林業センサス

### (3) 経営規模別農家数

本町における令和2年（2020年）の経営規模別構成比を見ると、1.0ha以上の農家が54.6%となっており、鹿児島県全体と比較して割合は高いですが、さらなる農地の集約化が重要です。

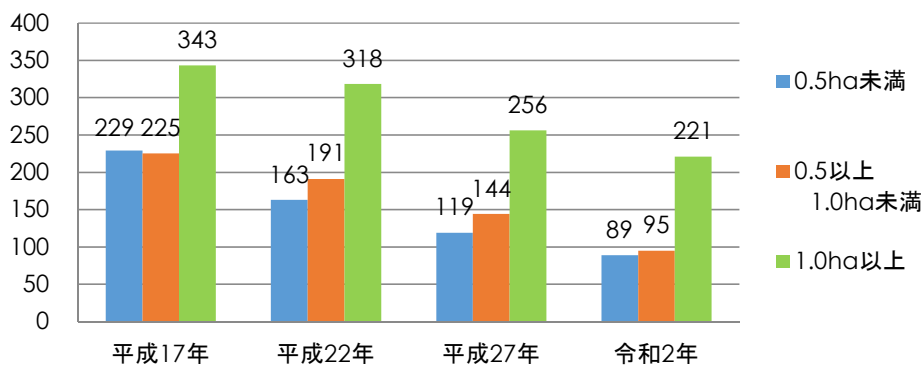
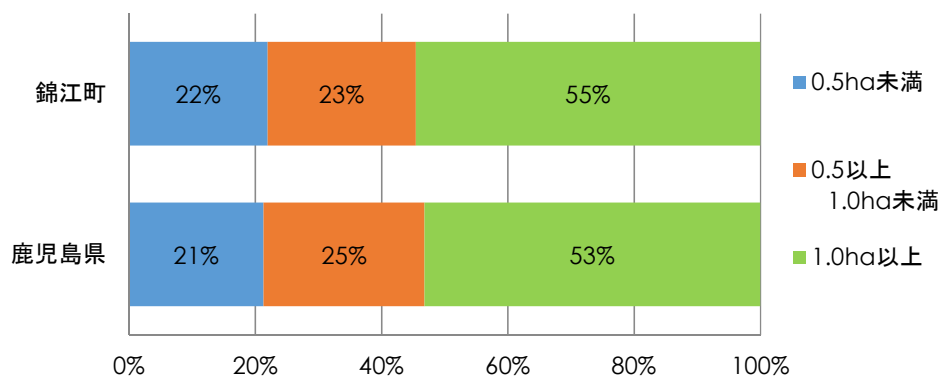
平成17年（2005年）からの推移を見ると、全体戸数としては平成17年の797戸から405戸と392戸（49.2%）減少しています。経営別では0.5ha未満、0.5以上1.0ha未満、1.0ha以上の3つ全ての区分の経営農家が、いずれの区分でも経営農家戸数が減少しています。

表 2.10 経営規模別農家数（令和2年：2020年）

分類	2020年（R2）				構成比		
	計	0.5ha未満	0.5以上 1.0ha未満	1.0ha以上	0.5ha未満	0.5以上 1.0ha未満	1.0ha以上
錦江町	405	89	95	221	22.0%	23.5%	54.6%
鹿児島県	29,717	6,340	7,575	15,802	21.3%	25.5%	53.2%

単位：戸，%  
出典：2020年農林業センサス

図 2.8 経営規模別農家数の割合と推移 (2005年～2020年)



出典：農林業センサス

#### (4) 農家人口

本町における農家人口は、平成17年から令和2年にかけての15年間で大きく減少しており、特に近年の減少が著しい状況です。1戸当たりの農家人口は、平成17年では1.9人/戸（総農家戸数1,360戸、総世帯員数2,596人）から令和2年では1.4人/戸（総農家戸数739戸、総世帯員数1,010人）と減少しています。また、性別と年齢構成で見ても男女ともに全ての年代で減少を続けています。

表 2.11 農家人口推移 (2005年～2020年)

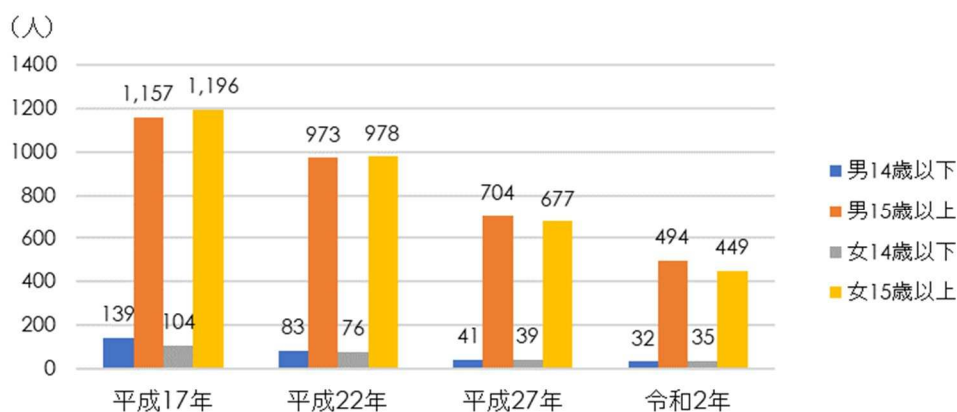
単位：人

項目	2005年	2010年	2015年	2020年	平成17年を100とした指数		
	H17年	H22年	H27年	R2年	H22年	H27年	R2年
錦江町	2,596	2,110	1,461	1,010	81.3	56.3	38.9
鹿児島県	161,187	128,006	97,001	68,469	79.4	60.2	42.5

出典：農林業センサス



図 2.9 性別及び年齢構成別農家人口推移（2005年～2020年）



出典：農林業センサス

### (5) 農業就業人口

本町における令和2年の販売農家就業人口は794人となっており、平成17年からの減少指数は、51.0%となっています。年齢構成で見ると60歳以上が63.4%となっており、59歳以下の構成比率は27.0%であり、鹿児島県の構成比率23.3%を若干上回っています。

表 2.12 販売農家就業人口推移（2005年～2020年）

単位：人

項目	2005年	2010年	2015年	2020年	平成17年を100とした指数		
	H17年	H22年	H27年	R2年	H22年	H27年	R2年
錦江町	1,558	1,310	936	794	84.1	60.1	51.0
鹿児島県	90,962	74,364	57,881	55,146	81.8	63.6	60.6

出典：農林業センサス

表 2.13 販売農家年齢構成別人口（2020年）

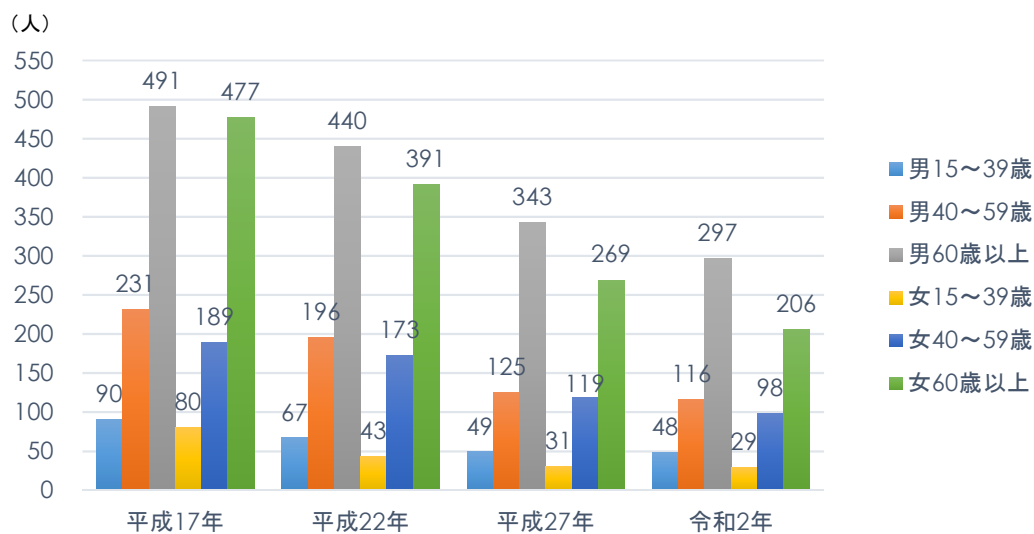
単位：人，%

項目	年齢構成別人口				構成比（%）		
	総計	15～39歳	40～59歳	60歳以上	15～39歳	40～59歳	60歳以上
錦江町	794	77	214	503	9.7%	27.0%	63.4%
鹿児島県	55,146	4,662	12,833	37,651	8.5%	23.3%	68.3%

出典：農林業センサス



図 2.10 年齢別販売農家就業人口推移（2005年～2020年）



出典：農林業センサス



## 2. 農業生産の動向

### (1) 農業生産実績

本町における農業産出額を見ると、耕種部門では、茶、ばれいしょ、さやいんげん、さつまいもの上位4作物で1,699.4百万円となっており約31%を占めています。

表 2.14 農業生産実績

作目名	作付面積	単収 (10aあたり)	収穫量	農業産出額 (百万円)
水稲	175 ha	442 kg	774 t	189
早期栽培	142 ha	451 kg	640 t	—
普通栽培	33 ha	405 kg	134 t	—
そば	1.3 ha	76.9 kg	1 t	0
落花生	3.5 ha	214.3 kg	7.5 t	5
さつまいも	210 ha	—	5,362 t	333
でん粉用	18 ha	—	474 t	18
焼酎用	147 ha	—	3,956 t	220
小計	165 ha	—	4,430 t	238
その他	45 ha	—	932 t	95
茶	148 ha	—	2,873 t	691
生葉生産量	—	—	2,397 t	288
荒茶生産量	—	—	476 t	403
野菜	244.5 ha	—	5,862.6 t	1,449.7
だいこん	43 ha	—	1,290 t	155.6
にんじん	3.9 ha	—	149.1 t	14.8
ごぼう	16.5 ha	—	109.8 t	69.3
ばれいしょ	53 ha	—	1,455 t	250.6
さといも	3.2 ha	—	59.4 t	6.1
はくさい	4.8 ha	—	190 t	15.1
キャベツ	8 ha	—	401 t	19.7
ブロッコリー	7.7 ha	—	60.9 t	11.7
レタス	9 ha	—	270 t	28
ねぎ(白ねぎ)	0.5 ha	—	4 t	1.2
ねぎ(青ねぎ)	30 ha	—	525 t	52.5
らっきょう	1.1 ha	—	14.2 t	8.5
かぼちゃ	5.5 ha	—	54.2 t	12.5
トマト	1.4 ha	—	146.3 t	73.1
ピーマン	3.3 ha	—	450.8 t	211.7
スイートコーン	0.5 ha	—	4.6 t	2
オクラ	0.9 ha	—	15.2 t	8.7
にがうり	3.8 ha	—	116.1 t	22.6
さやいんげん	43 ha	—	445 t	424.8
さやえんどう	0.2 ha	—	1.2 t	1.2
スナップえんどう	3 ha	—	55.4 t	42.7
しょうが	1.4 ha	—	37.7 t	5.3
いちご	0.8 ha	—	7.7 t	12.1
果樹	2.3 ha	—	12.5 t	20.4
ぶどう	2.1 ha	—	8.5 t	9.8
マンゴー	0.2 ha	—	4 t	10.6
花き	1.1 ha	—	390 千本	28
大中輪キク	0.7 ha	—	200 千本	13
小ギク	0.1 ha	—	3 千本	0.1
カーネーション	0.1 ha	—	69 千本	5
耕種部門 計				5,466.4
畜産部門	肉用牛	6,370 頭	—	3,230
	豚	52,100 頭	—	3,850
	ブロイラー	770,000 羽	—	3,530
畜産部門 計				10,610

出典：大隅地域の農業【令和6年度】畜産部門の農業産出額は第71次九州農林水産統計年報令和7年4月



## (2) かごしまの農林水産物認証制度(K-GAP)

かごしまの農林水産物認証制度(K-GAP)は、生産者の安心・安全な農林水産物を生産する取り組みを消費者に正確に伝え、鹿児島県産農林水産物に対する消費者の安心と信頼を確保するため、安心と安全に関する一定の基準に基づき審査・認証機関が認証する鹿児島県独自の認証制度です。現在、64品目223団体・個人(272件)が認証されており、錦江町では「かぼちゃ」、「ぶどう」、「マンゴー」、「ピーマン」、「ばれいしょ」が認証されています。

表 2.15 かごしまの農林水産物認証制度 認証状況 (R7.9.24 現在)

認証団体	市町村名	品目	認証年月日	認証回数
クラシックブドウ浜田農園	錦江町	ぶどう	R7.7.23	13回
		マンゴー	R7.4.22	13回
JA鹿児島きもつき なんぐう地区ピーマン部会	錦江町・南大隅町	ピーマン	R7.9.24	19回
鹿児島きもつき農業協同組合 なんぐう地区ばれいしょ専門部会	錦江町・南大隅町	ばれいしょ	R7.2.18	17回

出典：鹿児島県 HP 「かごしまの農林水産物認証制度」現在の認証状況

図 2.11 認証マーク



葉の部分で「農産物」、海の部分で「水産物」をそれぞれ表しています。また、青色は清らかな水や空気を、緑色で豊かな土壌をイメージしています。

桜島を円で囲むことで、鹿児島県産の農林水産物が「安心・安全」であることを象徴しています。

出典：鹿児島県 HP

## (3) 日本の良い農業の取り組み(J-GAP)

GAPとは Good Agricultural Practices の頭文字を取ったものであり、農畜産物を生産する工程で生産者が守るべき管理基準とその取り組みのことを指し、「良い農業の取り組み」や「農業生産工程管理」などと訳されます。

農業を続けていくには、人材不足、高齢化、資材コストといった課題や、農業の衛生管理、農薬・動物用医薬品の適切な使用、水の安全性の確保、労働安全の確保など、取り組むべき多くのことがあります。

GAPは、『持続可能な農業』のために生産者が取り組むことをまとめた基準です。

本町では、錦江町茶業振興会と鹿児島きもつきミニトマト部会が、それぞれ茶とミニトマトで認証を受けています。



JGAP 認証プログラムマーク

出典：一般財団法人日本 GAP 協会 HP



#### (4) かごしまブランド団体認定

鹿児島県では、「かごしまブランド確立運動」の充実・強化に向けて、鹿児島県を代表する農畜産物を「かごしまブランド産品」として指定し、当該産品を生産・出荷等する一定の基準を満たした団体を「かごしまブランド団体」として認定しています。本町では、県内全域で認定を受けている、かごしま茶、鹿児島黒牛（GI）、かごしま黒豚、かごしま地鶏の他、JA鹿児島きもつきにおいて「かごしまのばれいしょ」が認証を受けています。認定された団体は、産地づくりや販路拡大において、県のサポートを受けることができます。

表 2.16 かごしまブランド団体認証状況（R6.3 現在）

産 品	認証団体	市町村	認証年月日
かごしまのばれいしょ	JA 鹿児島きもつき	錦江町・南大隅町	R4.3.31

出典：鹿児島県 HP 「かごしまブランド団体認定状況」

#### (5) 有機 JAS 認証制度

日本農林規格等に関する法律（JAS 法）に基づく JAS 制度は、食品・農林水産品やこれらの取扱い等の方法などについての規格（JAS）を国が制定するとともに、JAS を満たすことを証するマーク（JAS マーク）を、当該食品・農林水産品や事業者の広告などに表示できる制度です。

JAS マークを商品の購入の際の判断材料にすることや、JAS を取引におけるアピールの手段とするなど、様々な場面で JAS・JAS マークが活用されています。JAS マークを表示できる事業者は、国の登録を受けた機関（登録認証機関）から、施設、生産管理、品質管理、検査などの体制が十分であると認証された事業者（認証事業者）に限られます。

表 2.17 有機 JAS 認証制度 認証状況（令和 7 年 7 月 31 日現在）

登録認証機関名	氏名又は名称	農林物資の種類	認証年月日
特定非営利活動法人 鹿児島県有機農業協会	株式会社今隈製茶	有機農産物	R2.4.3
	株式会社今隈製茶	有機加工食品	R7.3.24
	茶恋人茶生産組合	有機農産物	R7.5.26
	有限会社たしろ山茶香	有機農産物	R7.5.26

出典：農林水産省 HP 有機 JAS 認証事業者一覧（国内）

図 2.12 有機 JAS マーク



## 有機

JAS マークは、太陽と雲と植物をイメージしたマークです。農薬や化学肥料などの化学物質に頼らないことを基本として自然界の力で生産された食品を表しており、農産物、加工食品、飼料、畜産物及び藻類に付けられています。

出典：農林水産省 HP



## (6) 農場 HACCP 認定農場

畜産物の安全性向上のためには、個々の畜産農場における衛生管理をより向上させ、健康な家畜を生産することが重要です。このため、農林水産省では畜産農場に危害要因分析・必須管理点(HACCP)の考え方を取り入れた飼養衛生管理を推進しており、平成21年8月には、『畜産農場における飼養衛生管理向上の取り組み認証基準(農場 HACCP 認証基準)』を公表しました。公益社団法人中央畜産会及びエス・エム・シー株式会社では、この基準に基づき審査を行った上で、畜産農場を認証しています。令和7年8月時点の認定はありません。

## (7) 野生鳥獣による農作物の被害状況

本町は、農地のほとんどが山間地に挟まれた水田及び農地開発にて造成された畑地帯が多く、過疎化や高齢化等により農業生産の現場における生産活動の衰退などにより、生産条件の悪い農地から耕作放棄が拡大することに加えて、収穫された農産物のうち、規格外の残さの野積み等によりイノシシ、サル等の鳥獣による農作物の被害が増加しています。鳥獣被害が拡大していくことで農家の生産意欲が下がり、荒廃農地の増加が懸念されます。



【イノシシによる被害】



【さつまいもの残さ】



【イノシシ】



【イノシシ捕獲罠】



表 2.18 令和5年度野生鳥獣による農作物被害の状況（鹿児島県）

野生鳥獣による農作物被害額の推移（鳥獣・年度別）

（単位：千円，％）

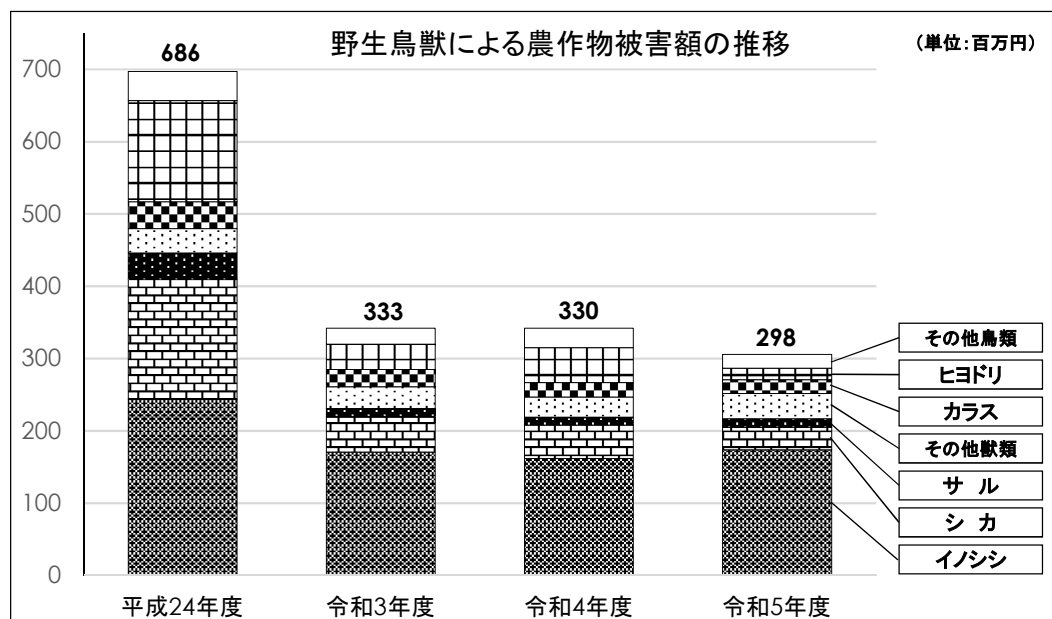
区 分	平成 24 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	比較			
					前年度比	前年度増減	構成比	
獣 類	イノシシ	244,049	170,920	161,603	174,369	108%	12,766	58%
	シカ	165,689	47,586	45,890	31,414	68%	△14,476	11%
	サル	35,586	11,602	11,383	11,966	105%	583	4%
	アナグマ	16,293	13,612	10,849	9,811	90%	△1,038	3%
	タヌキ	8,974	5,613	5,178	6,885	133%	1,707	2%
	その他獣類	8,665	9,937	12,134	17,784	147%	5,650	6%
獣 類 計	479,256	259,270	247,037	252,229	102%	5,192	85%	
鳥 類	カラス	37,425	24,488	20,256	18,984	94%	△1,272	6%
	ヒヨドリ	140,200	34,874	47,875	15,591	33%	△32,284	5%
	スズメ	18,491	7,635	4,728	4,613	98%	△115	2%
	その他鳥類	10,894	7,173	10,522	6,744	64%	△3,778	2%
鳥 類 計	207,010	74,170	83,380	45,932	55%	△37,448	15%	
合 計	686,266	333,439	330,417	298,161	90%	△32,256	100%	

※市町村報告による。

※四捨五入の関係で計と内訳の計が一致しない場合がある。

※その他獣類はウサギ，ネズミ，ノヤギ。その他鳥類はカモ，ツル，ハト，キジ，カワウ

※平成 24 年度は，平成 15 年度以降で被害額が最も多かった年度。



## 作物別の被害額

(単位:千円)

区分 多い順位	水稻	いも類	野菜	果樹	飼料作物	工芸作物	その他	合計		
	①	④	③	②	⑤	⑥	⑦		構成比	
獣 類	イノシシ	85,741	27,873	16,649	23,282	8,777	11,160	887	174,369	58%
	シカ	9,349	4,215	1,775	2,777	12,306	905	87	31,414	11%
	サル	119	1,045	4,825	5,353	-	-	624	11,966	4%
	アナグマ	437	3,351	4,937	755	135	3	193	9,811	3%
	タヌキ	13	2,014	3,876	521	352	-	109	6,885	2%
	その他獣	482	860	2,405	10,260	1,006	2,411	361	17,784	6%
	計	96,141	39,358	34,467	42,948	22,576	14,479	2,261	252,229	85%
	構成比	38%	16%	14%	17%	9%	6%	1%	100%	-
鳥 類	カラス	602	343	4,265	12,792	95	-	887	18,984	6%
	ヒヨドリ	-	462	9,118	5,087	-	-	924	15,591	5%
	スズメ	4,611	-	-	-	2	-	-	4,613	2%
	その他鳥	1,264	675	4,089	278	315	-	123	6,744	2%
	計	6,477	1,480	17,472	18,157	412	-	1,934	45,932	15%
	構成比	14%	3%	38%	40%	1%	-	4%	100%	-
合計	102,618	40,838	51,939	61,105	22,988	14,479	4,195	298,161	100%	
構成比	34%	14%	17%	20%	8%	5%	1%	100%	-	
対前年 比	80%	109%	92%	82%	94%	223%	115%	90%	-	

※四捨五入の関係で計と内訳は一致しない場合がある。

※「-」…数値無し



### 3. 農業農村整備状況

#### (1) 農業農村整備状況

本町における令和5年度までの農業農村整備状況は、かんがい排水(排水)・ほ場整備(水田)・農道整備は要整備量の50%以上の整備率となっています。整備率が50%に満たない工種の内、ほ場整備(畑)は12.3%で、県の整備率63.4%と比較して低い割合となっています。将来は担い手が中心となる農業経営構造となると考えられることから、農業経営の安定化と食料の安定供給の観点から、農業生産基盤整備を計画的に導入することが望まれています。

図 2.13 生産基盤整備率

単位：%

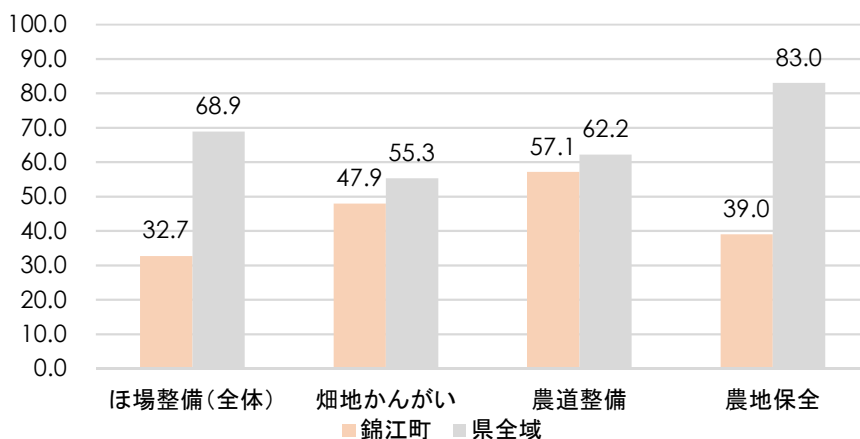


表 2.19 生産基盤整備率

区分	かんがい排水（用水）			かんがい排水（排水）			畑地かんがい		
	要整備量	整備済量	整備率	要整備量	整備済量	整備率	要整備量	整備済量	整備率
	ha	ha	%	ha	ha	%	ha	ha	%
錦江町	511	239	46.8	511	332	65.0	854	409	47.9
県全体	38,200	31,603	82.7	38,300	30,469	79.6	56,100	30,998	55.3

区分	ほ場整備（全体）			ほ場整備（水田）			ほ場整備（うち大区画）		
	要整備量	整備済量	整備率	要整備量	整備済量	整備率	要整備量	整備済量	整備率
	ha	ha	%	ha	ha	%	ha	ha	%
錦江町	1,577	515	32.7	511	384	75.2	213	0	0.0
県全体	103,500	71,346	68.9	32,700	26,495	81.0	7,800	1,555	19.9

区分	ほ場整備（畑）			農道整備			農地保全		
	要整備量	整備済量	整備率	要整備量	整備済量	整備率	要整備量	整備済量	整備率
	ha	ha	%	Km	Km	%	ha	ha	%
錦江町	1,066	131	12.3	387	221	57.1	1,076	420	39.0
県全体	70,800	44,856	63.4	18,800	11,700	62.2	75,500	62,646	83.0

出典：農業農村整備事業における市町村別整備水準 令和6年度調査結果（令和7年4月）



本町における生活環境基盤整備状況では、集落道路は、98.1%の整備率となっており、県内の整備率と比べると高い状況です。営農飲雑用水については、要整備量に対して85.2%の整備率となっており県平均とほぼ同整備率となっています。防災安全施設については、91.9%と高水準となっています。

図 2.14 生活環境整備率

単位：%

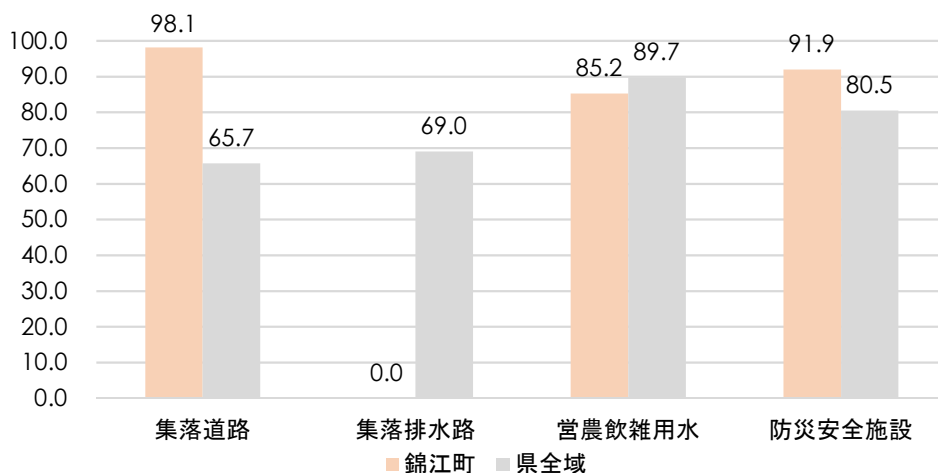


表 2.20 生活環境整備率

地 区	集落道路			集落排水路施設		
	要整備量 km	整備済量 km	整備率 %	要整備量 km	整備済量 km	整備率 %
錦江町	59	58	98.1	—	—	—
県全域	7,657	5,028	65.7	1,899	1,310	69.0
地 区	営農飲雑用水			防災安全施設		
	要整備量 戸数	整備済量 戸数	整備率 %	要整備量 箇所	整備済量 箇所	整備率 %
錦江町	3,850	3,281	85.2	247	227	91.9
県全域	117,838	105,717	89.7	47,678	38,360	80.5

出典：農業農村整備事業における市町村別整備水準 令和6年度調査結果（令和7年4月）



## 第4節 錦江町の自然環境

### 1. 地域指定等

#### (1) 大隅南部県立自然公園

大隅南部県立自然公園は、南大隅町外之浦から肝付町火崎に至る太平洋に面した海岸部と、雄川及び花瀬川流域の一部が指定されています。

県立自然公園は、優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図り、国民・県民の保健・休養・教化に資することを目的とした制度で、県の自然を代表する優れた自然の風景地として指定されています。

#### (2) 環境省選定『日本の重要湿地 500』

環境省は、湿原・干潟等の湿地の減少や劣化に対する国民的な関心の高まり、ラムサール条約における湿地定義の広がりなどを受けて、ラムサール条約登録に向けた礎とすることや生物多様性の観点から重要な湿地を保全することを目的に「日本の重要湿地 500」を平成13年に公表しています。

本県では、ため池、河川、浅海域、サンゴ礁等の湿地環境から40箇所が選ばれており、錦江町では、大隅半島山地の源流域と大隅半島のカワゴケソウ類の生育地が選ばれています。

表 2.21 「日本の重要湿地 500」選定箇所

湿地タイプ	生物分類群	生育・生息域	選定理由
河川 その他湿地	爬虫両生類	大隅半島山地の源流域	オオスミサンショウウオの生息地
	水草	大隅半島のカワゴケソウ類の生育地	カワゴケソウとカワゴロモの生育地、温帯域にカワゴケソウ科植物が生育する 【神ノ川】カワゴロモの生育地 【雄川】カワゴロモ、タシロカワゴケソウの生育地

#### (3) 鳥獣保護区

鹿児島県では、鳥獣保護法（鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律）によって、それぞれの地域ごとに「鳥獣の保護」と「狩猟の適正化」を図ることを目的に鳥獣保護区等が指定されています。

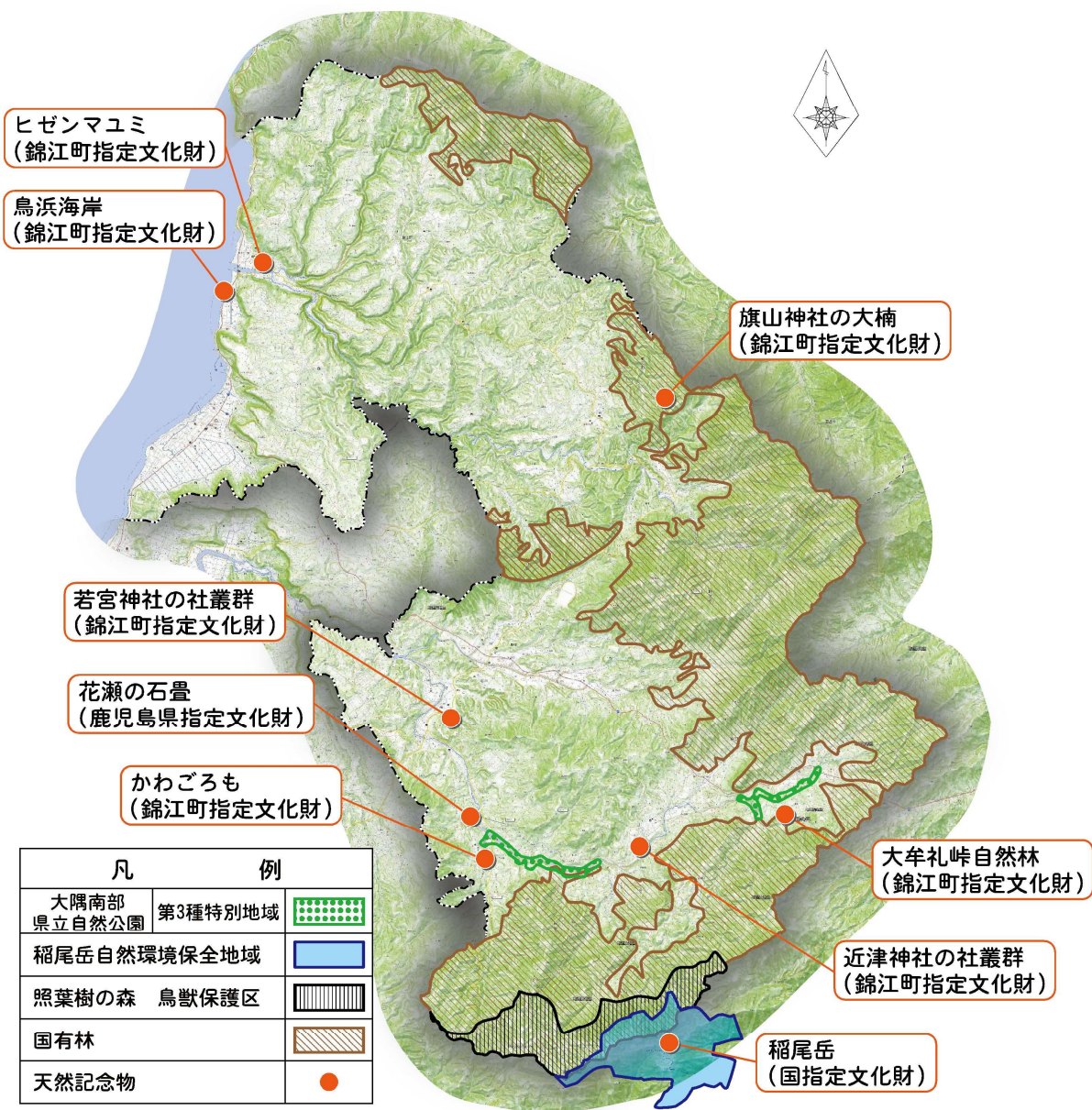
県内の鳥獣保護区は、国指定鳥獣保護区が4箇所5,997ha、県指定鳥獣保護区は、128箇所、61,853ha（令和6年11月1日現在）が指定されています。

本町では、照葉樹の森鳥獣保護区（令和3年指定）が指定されています。

鳥獣保護区では、野生鳥獣の捕獲が禁止されています。特に鳥獣の保護又は鳥獣の生息地の保護を図ることが必要な場合には、鳥獣保護区内に特別保護地区を指定しており、特別保護地区内で水面の埋立て又は干拓・立木竹の伐採、工作物の設置等を行う場合は、環境大臣又は都道府県知事の許可を受ける必要があります。



図 2.15 大隅南部県立自然公園区域・鳥獣保護区等位置図



出典：環境省 HP・鹿児島県 HP 資料 加工



#### (4) 景観行政団体

景観法では、地域における景観行政を担う主体として「景観行政団体」という概念を設けており、景観行政団体になることで、景観計画などの景観法に基づく各種施策を活用することができるようになり、地域の歴史、自然等を生かしたまちづくりを推進することができます。県内では、43団体（19市20町4村）全市町村が景観行政団体になっています。（令和5年3月31日現在）

錦江町は、平成20年3月10日から「景観法（平成16年法律第110号）」に基づく景観行政を自ら行うことができる景観行政団体になりました。

出典：国土交通省省HP・鹿児島県HP

#### (5) ゼロカーボンシティ共同宣言

「ゼロカーボンシティ」とは、2050年にCO<sub>2</sub>（二酸化炭素）排出量を実質ゼロにすることを表明した自治体のことです。

令和3年7月14日、肝付町コミュニティセンターにて、錦江町、南大隅町、肝付町の3町による「ゼロカーボンシティ共同宣言」が行われました。

錦江町・南大隅町・肝付町では、公共交通を地域の共通課題として掲げ、広域連携による施策を展開するほか、これまでさまざまな分野における広域連携の取り組みを推進してきました。今後、2050年に向けて3町が連携し、地球温暖化対策に取り組むことで、相乗効果を生み、脱炭素社会の構築に向けて加速、強化を図ることができるとともに、これまでの経験と各自自治体の特性を活かした「ゼロカーボンシティ」の実現と地域の活性化につながる取り組みが期待されています。



## 2. 大隅半島の地形・地質・水環境

### (1) 地形

大隅半島は、南北に伸びる山地や台地がともに発達する半島で、佐多岬は九州本土最南端となっています。大隅半島の地形は大きく山地と台地に区分され、山地は入戸火砕流堆積物の非溶結部、いわゆる「シラス」の分布地域によって、高隈山地と肝属山地に南北に分断された分布を特徴としています。高隈山地は、新第三系の高隈山花崗岩と白亜系の四万十層群が分布しており、肝属山地は、新第三系の大隅花崗閃緑岩と古第三系の日南層群が分布しています。河川は北部台地を流れる肝属川、南部台地を流れる雄川などがあります。

#### 1) 大隅半島南部の地形

大隅半島の南部は、甫与志岳(968m)、六郎館岳(754m)、稲尾岳(959m)など700mを超える峰々が北東～南西方向に連なっています。これらはいずれも新第三紀中新世の南大隅花崗岩で形成されており、山地の南東部は海岸まで花崗岩の山地が広がりますが、北東部と最南端部は古第三系日南層群と第四系阿多溶結凝灰岩により分布が分断されています。

肝属山地には、全体として北東～南西方向の明瞭なリニアメントが発達しています。細かく見ると、国見山、甫与志岳、荒西山付近では北東～南西方向、稲尾岳付近では東北東～西北西方向、木場岳付近の北北東～南南西方向にリニアメントが発達しています。

これらは、基盤岩中の断層・節理・岩脈の発達する方向を示唆するものと考えられ、山地の開析に大きく影響しています。特に甫与志岳の南西部、荒西山と六郎館岳に挟まれる地域では、直線的な谷が長いところで10km以上も発達しています。

半島南部の稲尾岳周辺では、山地の北西部斜面が比較的緩いのに対して、南東部は対称的に急斜面が発達しており、両者の境界となる尾根は緩やかに傾斜しています。肝付町大浦～山頂、南大隅町打詰～山頂、両町の境界付近の海岸～山頂までは、下刻の進んだ谷地形が発達しており、それらの谷地形に挟まれる尾根には、太平洋側に複数の微山稜が発達しています。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997年）P79より抜粋

#### 2) 台地の地形

北部台地とは構成する堆積物が異なり、鹿児島湾南部の阿多カルデラより噴出した阿多火砕流堆積物よりなります。ここでの阿多火砕流堆積物は、ほぼ強溶結の溶結凝灰岩によりなるため、台地の周縁部には北部台地同様に急崖が発達しますが、一般に数m幅の柱状節理の発達する「メサ地形」の様相を呈します。また、錦江町花瀬では、河床に直接阿多溶結凝灰岩がほぼ全面にわたって露出しており、ポットホールも見られます。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997年）P80より抜粋



### 3) 海岸の地形

大隅半島の海岸地形は、岩石海岸と砂浜海岸が好対照をなしています。基盤岩の露出する地域では、海食崖巨礫海岸が発達しています。巨礫海岸は、肝付町柳井谷、南大隅町片之坂、錦江町大川などの花崗岩の分布域で良く見られ、直径1m内外の円礫で構成されています。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997年）P81より抜粋



鳥浜地域（平地-段丘地形）



神ノ川河口（砂浜海岸）

### (2) 地質

大隅南部の基盤の地質は、新生代古第三紀に海底に堆積してできた日南層群です。そして、新第三紀中新世に貫入した花崗岩類が、その後の地殻変動で隆起を続け、現在見られる肝属山地となっています。また、錦江町大根占北部では安山岩類の小規模な貫入も見られます。第四紀更新世には、錦江湾入口付近に入江ができ、そこに堆積



した大根占砂礫層が見られます。さらに、約10万年前に阿多カルデラを形成した大噴火に伴って噴出した、多量の阿多火砕流堆積物が広く分布しています。

また、鬼界カルデラや池田カルデラ、開間岳などからの火山噴出物が、表層を薄く覆って分布しています。

肝属山地北部の肝付町高山～錦江町大根占にかけてと、雄川河口付近や南大隅町南部には、志布志地域に見られる日南層群の西方延長部が分布しています。砂岩、泥岩およびそれらの互層よりなり、一部緑色岩を挟んでいます。地質構造は分布が断続的なため不明な点が多いですが、一般に走向は北東～南西方向で、北傾斜を示すことが多いです。

肝属山地は大隅花崗閃緑岩体よりなり、西南日本外帯花崗岩質岩体のなかで最も露出面積が広く、北東～南西方向に伸長しています。明色～暗色、粗粒～細粒、等粒状～斑状の花崗閃緑岩～花崗岩からなり、岩相が非常に不均質で、節理がよく発達しています。周辺の日南層群を非調和に貫き、幅約500mにわたり接触変成作用を与えています。

錦江町大根占北部の標高300mの山々には安山岩類が分布しています。これは野里安山岩と呼ばれ、複輝石安山岩質溶岩を主とし、同質の碎屑岩類を伴い、柱状節理がよく発達しています。錦江町大根占～南大隅町北部や南大隅町伊座敷付近には、阿多カルデラを形成した火山活動に伴って噴出した阿多火砕流堆積物が広く分布しています。ここでは、上部は溶結度が高く、強く固結し、黒曜石のレンズがよく発達しますが、下部は非溶結のため侵食が進み急崖になっています。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書IV 大隅の自然（鹿児島県立博物館1997年）P82より抜粋

### 1) 大隅半島南部の花崗岩類

大隅半島には、北部の高隈山付近と南部の内之浦～佐多に広く露出しています。高隈山のものとは岩質の違いから、優白質の黒雲母花崗岩～花崗閃緑岩の新光寺型と、優白質で細粒のアプライト質花崗岩の猿ヶ城型に区分されます。新光寺型は石英、正長石、斜長石、黒雲母を主成分としています。

南部のものは黒雲母花崗岩～花崗閃緑岩で、岩質の違いから高山型、川口型、大浦型、辺田大川型、花瀬型、甫与志岳型、国見型の7つに区分されます。甫与志岳型のように、いずれも石英、正長石、黒雲母を含むが、他に高山型ではざくろ石、川口型では少量のカミングトン閃石・斜方輝石、大浦型では少量のカミングトン閃石、辺田大川型では普通角閃石、花瀬型では少量のカミングトン閃石、国見型では白雲母をそれぞれ含む点で区別されるが、岩体そのものは漸移します。

大隅半島南部の花崗岩類は風化され、さらに侵食作用を受けて一般的になだらかな地形をつくり、稲尾岳などの山頂は丸くなっています。しかし、鹿児島湾に面した部分では急崖となっており、これは阿多カルデラのカルデラ東壁に相当しているためです。

花崗岩の風化土は「まさ土」と呼ばれますが、花崗岩の露出域で緩斜面の所にはかなり広く分布します。このまさ土は斜面崩壊を誘発しやすく、内之浦岸良や稲尾岳斜面などで見られました。

稲尾岳斜面では古い時代に発生した斜面崩壊の跡が認められます。ここではまさ土の上に堆積するアカホヤや池田降下軽石、開間岳噴出物も巻き込んでおり、軽石やスコリア、火山灰などが混在した堆積物となっており全体的に砂状です。



また、内之浦五郎ケ元ではまさ土の上に、層厚 2m の降下軽石層、層厚 1m の降下火山灰層、阿多溶結凝灰岩がのる露頭が見られます。降下火山灰中には、平均粒径 1cm の火山豆石が見られ、阿多溶結凝灰岩の最下部 70cm はほとんど溶結していません。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997 年）P85 より抜粋

## 2) 第四系

### ① 堆積岩類

大隅半島南部の第四系は、基盤の日南層群や新第三紀の野里安山岩を、不整合に覆って堆積する大根占砂礫層、およびそれを覆い台地を構成している火砕岩類からなります。大根占砂礫層は段丘ないし小さな入江に堆積した地層で、台地の裾野にわずかに現われているのみで分布は狭いです。神川の大滝入り口では、この層の一部をなす凝灰質シルト層が見られます。全体に細かく砕かれボロボロであります。この中には豊富な貝化石、刺皮動物化石、植物化石が産出します。

### ② テフラ

大隅半島南部は阿多カルデラの東側に位置しており、それに関係する火山に起源を持つ多くのテフラが堆積しています。本地域でもっとも古いテフラは鳥浜火砕流堆積物で、噴出年代はおよそ 23 万～25 万年前と推定されます。この火砕流堆積物はカクセン石を特徴的に含む白色をした非溶結のもので、分布は断片的で大隅半島では錦江町鳥浜付近にわずかに見られるのみです。この上には阿多カルデラ起源の多数のテフラが堆積しています。これらのテフラは約 10 万年前に相次いで噴出しましたが、主要な活動は阿多火砕流堆積物の噴出でした。阿多火砕流堆積物は岩相の違いにより大きく三層に区別されていますが、もっとも規模が大きいのは最後のもので、広く南九州を覆い人吉盆地まで達しています。大根占地域から根占地域にかけてはメサ地形を形成しています。阿多火砕流堆積物は中～強溶結であり、レンズ状に引き伸ばされた軽石などが目立っています。

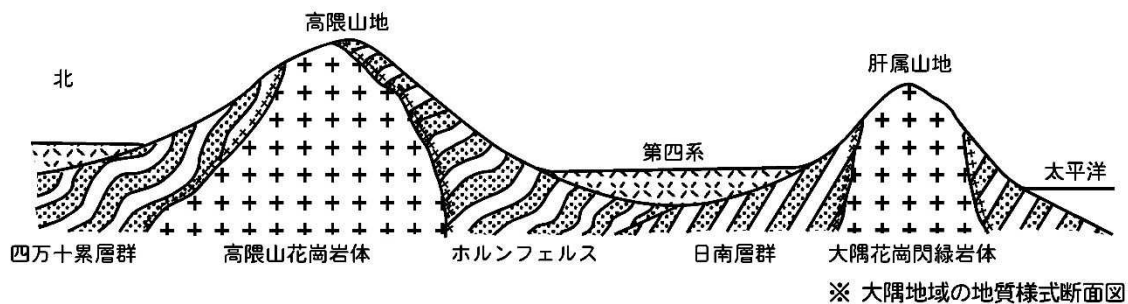
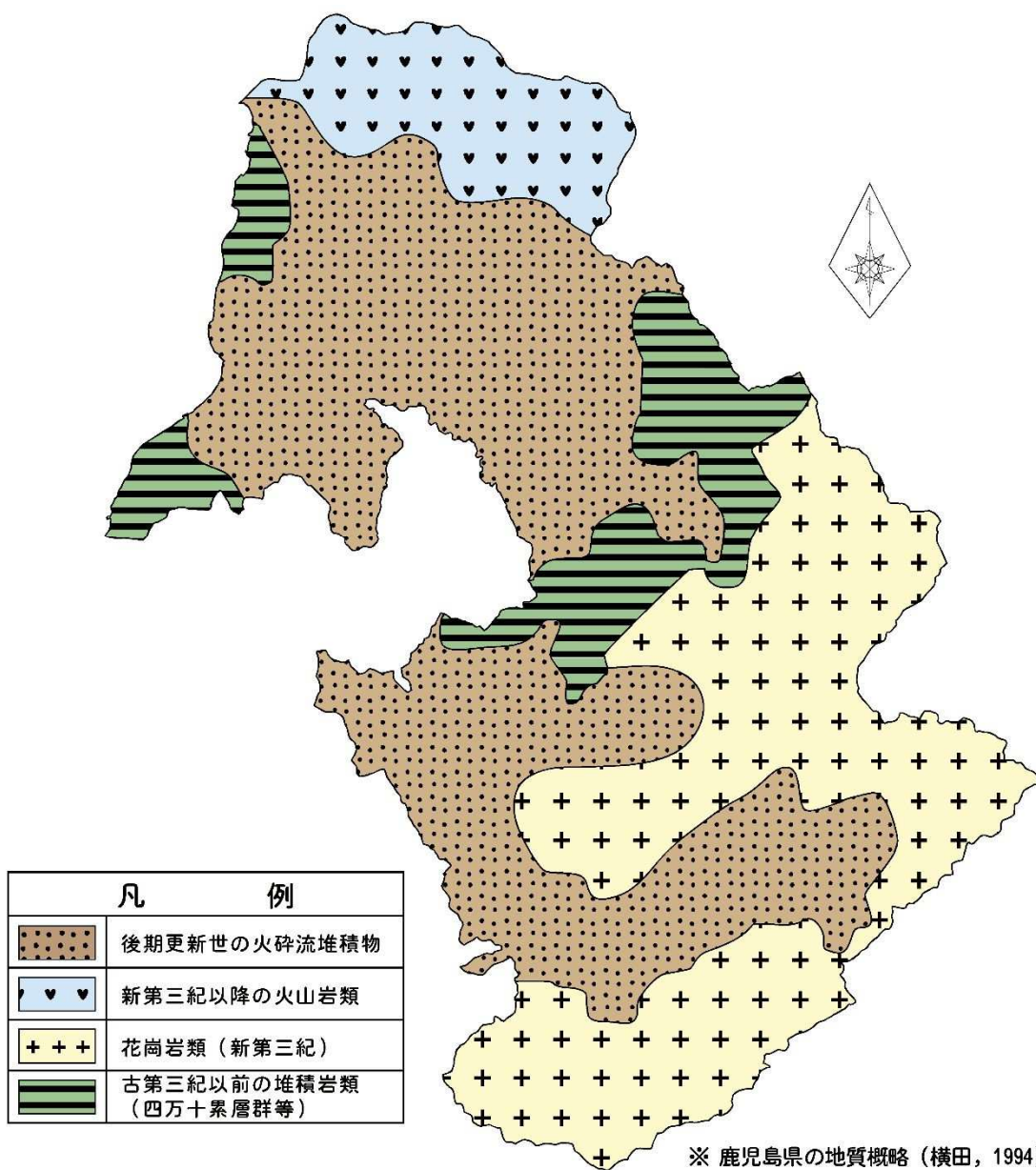
阿多火砕流堆積物の上には、巨大な岩片を多く含む田代火砕流堆積物があり、それを覆って 9 万年より新しいテフラが堆積しています。これらのテフラは、それぞれ起源が異なります。最も古いテフラは鬼界カルデラ起源の鬼界葛原テフラ（西之表火砕流）で、大隅半島での厚さは数十 cm で、堆積層の特徴により三層に区別されます。この上には始良カルデラ起源の福山降下軽石、起源未詳の花の木軽石、指宿中央火口丘群の清見岳起源の火山灰、軽石、スコリア互層、起源未詳の宿利原軽石があり、さらに始良カルデラ起源で黄色を帯びた大隅降下軽石が 2～3m の厚さで堆積しています。

これらを覆って鬼界カルデラ起源のアカホヤが堆積しています。アカホヤは下部の幸屋降軽石、中部の幸屋火砕流堆積物、上部のアカホヤ火山灰からなり、全体に色調が赤橙色を帯びていることから名付けられた俗称です。降下軽石は大豆大以下の軽石からなり、火砕流堆積物の直下には黒灰色をした砂状のグランドレイヤーがあります。火山灰の直下には 1cm 以下の大きさの火山豆石が入っています。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997 年）P87 より抜粋



図 2.16 錦江町の地質図



### (3) 山地

大隅半島南東部に位置する肝属山地は、四万十帯による山地とそこに貫入してきた花崗岩による山地、その山地の谷を埋めた阿多火砕流の溶結凝灰岩による台地や平野です。ほとんどの山々が花崗岩の貫入岩体です。花崗岩の中には結晶質の部分もあり、大きな石英や長石の脈が見られます。山地北西側の一部（特に国見岳周辺）には、四万十帯の露出も見られ、いたるところで採石場が見られます。

特に、稲尾岳及び稲尾岳周辺は照葉樹林が原生林として現存するため、昭和50年に環境省の自然環境保全地域に指定されています。植物・動物・岩石の採取は禁止されています。

出典：鹿児島県地学会（令和5年1月）

稲尾岳自然環境保全地域は、大隅半島南部における稲尾岳山地部のうち、稲尾岳(959m)と、その北方の山稜部を中心とした地域です。

本州南部以南の西南日本の極相林である照葉樹林は、世界的にみて希少な森林です。



稲尾岳

特に大隅半島には、この森林が比較的まとまって残っています。本地域は、イスノキ、ウラジロガシ、アカガシ、スダジイを主体とした照葉樹林の森林から、標高が増すにつれてヒメシャラが混在し、さらにその上部にはモミを主体とした森林が見られます。これらの天然林には、イノシシ、ホンドタヌキ、テンなどの哺乳類が多く、鳥類では、エナガ、シジュウカラ、ヤマガラ、オオアカゲラなどの留鳥や、ルリビタキなどの冬鳥、エゾビタキ、サシバなどの旅鳥や南九州特有のコシジロヤマドリが見られます。

また、ここは、昆虫類の生息にとっても良好な環境を示しており、キリシマミドリシジミ、カラスシジミの分布南限地、フチトリアツバコガネ、チビサナエの分布北限地となっています。



#### (4) 河川

雄川水系は、鹿児島県の大隅半島の南側に位置し、その源を鹿児島県肝属郡錦江町田代の六郎館岳に発し、麓川・赤瀬川・馬場川等の支川を合わせて西流し、錦江町から南大隅町を經由し鹿児島湾に注ぐ河川延長 20.0km、流域面積 132.5k m<sup>2</sup>の二級河川です。

雄川流域の気候は南海型気候区に属し高温多雨ですが、冬季は晴れる日が多いことが特徴です。雄川流域の気温は、年平均 16.3℃（平成 20～29 の鹿児島地方気象台田代観測所平均値）で、年平均降水量は 3,144mm（平成 20～29 年の鹿児島地方気象台田代観測所平均値）であり、全国平均の約 1.8 倍となっています。

流域の地質は、火砕流堆積物をはじめ、溶結凝灰岩が中・上流を占めています。下流は沖積層で三角州低地となっています。また、流域の地形は中・上流部で起伏山地や台地となっており、下流は三角州低地となっています。

流域の土地利用は、全体の約 88%が山地で占められており、約 9%が水田、約 3%が宅地で占められています。山地は常緑広葉樹が多く景観に優れ、薪炭材として重宝されたマテバシイ等があります。流域には、大隅南部県立自然公園の一部を含んでいます。また、河川には、大隅半島の 4 河川のみに分布が知られている県指定天然記念物のカワゴロモが自生しているほか、中・上流域にのみ分布しているタシロカワゴケソウが自生しています。

出典：雄川水系河川整備計画（令和 3 年鹿児島県）



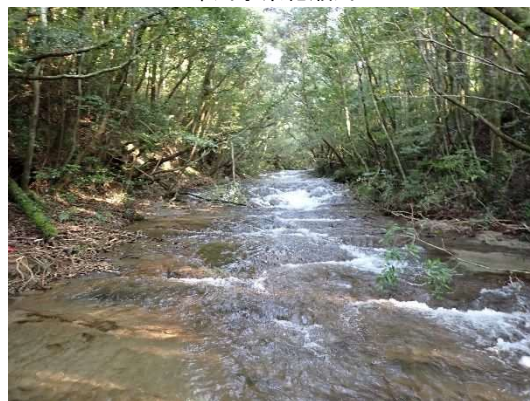
神ノ川



雄川水系花瀬川



神ノ川水系水流川



雄川水系（鶉戸野）





## (5) 用水路

本町には、新田開発のために造成された歴史的な土地改良施設として、1665年（寛文5年）、時の藩主島津久光公により命ぜられ造られた「両根占用水路」があります。用水路は、南大隅町を流れる二級河川「雄川」から水を取水し、川の北側へ「川北用水路」が、川の南側へ「川南用水路」が流れています。

本町へは、川北用水路が南大隅町の水田を潤したあと、南大隅町と錦江町の境にある隧道を通り配水しています。頭首工で取水の後に、いくつもの地形的難所を通過している他、生物の生息環境の創出、農村景観の構成要素や、地域用水機能を備えた多面的機能を有しています。

また、山間部にもかんがい用水を取水するための固定堰が多く設けられており、河川と水田、水田と河川との水のネットワークが農振地域内を網の目状に広がっています。



両根占頭首工【雄川】



両根占用水路【馬場地域】



山腹用水路【笹原地域】



永江堰【吉崎地域】



### 3. 錦江町の生態系

#### (1) 大隅半島の植物相

大隅半島中南部は、中部大隅において最高峰の大笠柄岳（1237m）を主峰とする中生代白亜紀の地層とその後貫入した花崗岩からなる高隈山系、南部大隅において甫与志岳を最高峰とする新生代第三紀の地層に貫入した花崗岩からなる肝属山地、およびそれには含まれた鹿屋市を中心とする肝属平野と呼ばれるシラス台地（笠之原台地）から形成されています。この地方は温量指数 120～140 の地区にあたり、大隅、薩摩半島の南部を通る最寒月（1月）の平均気温 8℃、年平均気温 18℃の等温線は無霜地帯と重なり、屋久島から北上してソテツ、フカノキ、ギョクシンカなどが分布し、この付近が亜熱帯植生の北限地にあたると考えられます。

また、この地区は地形的、気候的にみて植生が非常に豊かであり、昔から多くの人々が植物研究に訪れ、植物名にこの地方名を冠したものが多く、例えば高隈を冠したタカクマキジノオ（イワヘゴ）、タカクマガンピ、タカクマミツバツジ、タカクマムラサキ、タカクマヒキオコシ、タカクマソウ、タカクマザサ、タカクマホトトギスなど 8 種類、辺塚を冠したものにヘツカシダ、ヘツカボタンヅル、ヘツカミツバツジ、ヘツカコナスビ、ヘツカリンドウ、ヘツカニガキ、ヘツカランがあり、佐多を冠したサタソウ、サタツツジ（ヒメマルバサツキ）、サダカズラ（ホルトカズラ）また、大隅を冠したオオスミクジャク、オオスミイワヘゴ、オオスミツチトリモチ、オオスミナツトウダイ、オオスミミツバツジ、オオスミキヌランなどの植物があり、極めて興味深い植物相を示しています。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997 年）

#### (2) 大隅半島の植生

大隅半島は、北部に漸次低下して日向山地や霧島火山群に連なり、北西部に位置する高隈山塊と南部の肝属山地および中央部の俗称シラスといわれる曾於丘陵地帯に区分されます。高隈山塊は主峰の大笠岳（1236.8m）をはじめ御岳（1181.7m）、横岳（1094m）などの峰が連なっています。海拔 1000m を越す稜線帯には日本における南限のブナ林が発達しています。山麓帯から中腹部にかけての山体部の樹木の多くは伐採されてスギやヒノキなどの植林地となっており、自然林は稜線沿いや各地に部分的に残存しているのみです。これらの自然林は山麓帯のタブ林に続いてシイ林が広い面積を占めています。高山地帯はイスノキウラジロガシ林やアカガシ林に続いてモミを主とする針葉樹を含む常緑広葉樹林または針葉樹林となり、稜線沿いはブナを主とする落葉樹林となっています。山頂部には山頂性風衝低木林が発達しており、山頂性の草原も見られます。

肝属山地一帯はかつて秘境といわれ、鬱蒼とした原生の常緑樹林におおわれていた地帯でした。ところが現在ではこれらの自然林の多くは伐採されてスギ・ヒノキ植林地と化し、自然生の常緑広葉樹林は部分的に局所的に残存しているのみです。また、最近、これらの山地の山頂稜線帯においてモミの大木の立ち枯れが異常に多いのが目につき、酸性雨によるものか異常気象によるものか原因はわからないが憂慮されます。



中央部のシラス台地はよく開析されて谷状地形が発達しています。台地の多くは農耕地として利用され、台地や台地斜面にはタブ林やコジイ林、マテバシイ林およびスギ・ヒノキ植林などが発達しています。平地や谷状地の多くは水田として利用されており、湿地植物群落の発達も見られます。

### 1) 常緑広葉樹林域(ヤブクラス域)

九州最南端に位置する大隅半島では海拔およそ 1000m を越す高山地は高隈山系を除くと皆無に等しいです。従って、高隈山系などにおいて地形、地質、土壌、風衝などの厳しい立地条件下にある山頂稜線帯に発達するごく僅かの落葉広葉樹林域の植生を除く低山地帯は総て常緑広葉樹林域(ヤブツバキクラス域)に属する植生です。南部海岸地帯は温暖多湿な無霜地帯で亜熱帯性の植生も発達しています。平地から低山地帯にはタブ林が発達しており、それに続いておよそ海拔 450m あたりまではシイ林が見られ、それ以上の高のイスノキウラジロガシ群落に移行します。イスノキウラジロガシ群落帯にはアカガシの優占する群落も見られ、海拔およそ 800m あたりからモミを主とする常緑針葉樹林やモミなどの針葉樹とアカガシやイスノキなどの常緑広葉樹が混生する群落が発達しています。

### 2) 稲尾岳とその周辺の植生

稲尾岳(959m)は、北は錦江町と境を接し、南大隅町東部と肝付町南部にまたがる稲尾岳山塊の主峰で、太平洋に面する南東斜面は屏風のように切り立った断崖となって海に突入しています。

稲尾岳のそばには枯木岳があります。稲尾岳は、かつては海岸から山頂に至るまで鬱蒼とした原生林におおわれた神々しいばかりのすばらしい山であり、信仰の山として稲尾岳神社が建立されたのもうなずけます。現在は八合目から下は伐採されてスギ・ヒノキ植林地となっており、八合目から上の高山地は自然林が残っていて、自然環境保全地域として昭和 42 年 7 月 6 日天然記念物に指定されています。

海岸風衝の断崖地や急傾斜地にはウバメガシやマルバニッケイ、ハマヒサカキ、マサキ、トベラ、シャリンバイなどを主とする風衝低木林が発達しています。竹之浦の海岸の岩地にはツメレンゲ群落が発達しています。山麓地帯はアコウやタブノキを主とする群落で、モクダチバナ、バクチノキ、ショウベンノキ、フカノキ、ギョクシンカなどの亜熱帯的要素を多く含んでいます。辺塚にはビロウ群落が発達しています。続いて海拔 400m あたりまではスダジイ群落が主で、スダジイ、タブノキ、マテバシイ、イスノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、ホルトノキ、バリバリノキ、ヒメユズリハ、タイミンタチバナ、ミミズバイなどが混生しています。低木層にはヒサカキ、ネズミモチ、シマイズセンリョウ、サツマルミノキ、サザンカ、サンゴジュ、ギョクシンカなどが優占しています。マテバシイの優占する群落は山麓地帯からやや高山地帯にかけての乾性的な立地に二次的に広く認められます。

高度を増すにつれてイスノキが多くなり、海拔 700m あたりまではイスノキウラジロガシ群落となり、サカキ、クロバイ、ハイノキ、シキミ、ミヤマシキミなどが下層に優占するようになります。海拔 800m を越すとモミ群落が発達します。稲尾山塊にもツガの自生は無く、シラキ、ウリハダカエデ、コミネカエデ、ヒメシャラなどの落葉広葉樹の優占度が高くなってきます。アカガシ群落はイスノキウラ



ジロガシ群落やモミ群落が発達する標高において部分的に発達しています。稲尾山塊のモミも立ち枯れが多く目につき憂慮されます。

山頂部や稜線帯はイヌツゲ、ハイノキ、シキミ、シラキ、コックバネウツギなどによって構成される山地性風衝低木林または亜高木林となっています。

### 3) 田代・花瀬の植物

旧田代町の南側を雄川が流れ、川原池野地区では、川床が溶結凝灰岩の基石が畳をしきつめたようになっていきます。名勝地として知られ、夏期にはキャンプ地として多くの人々の憩いの場所にもなっています。サイゴクホングウシダ、ヤワラハチジョウシダ、サツマハチジョウシダ、オオカナワラビ、シラガシダ（南限）、ホソバヤブソテツ、オオスミクジャク、ニセコクモウクジャク、イワヘゴ、マルバベニシダ、クロミノイタチシダ、コモチシダ（南限）、ハマシダウナギ、イヌシデ（南限）、ツブラジイ（大隅半島南限）、ハルニレ、イヌヤブマオ、カワゴロモ、タシロカワゴケソウ、ヒメレンゲ、クサアジサイ（南限）、サワアジサイ、シコクチャルメルソウ、イワガラミ、ゴトウヅル、ツルキジムシロ、ヒメバライチゴ、オオバナスビトハギ、イヌハギ（南限）、ハネミイヌエンジュ、ツゲモチ、シタキツルウメモドキ、ツリフネ（南限）、オオクマヤナギ（南限）、ナンゴクオオクマヤナギ、ネコノチチ（京岳（田代）南限）、ウリノキ（南限）、アデク、ヒメノボタン、ミズタマソウ（南限）、ウド（南限）、ハリギリ（県本土南限）、シシウド（南限）、セントウソウ、ハナウド（南限）、コバノハナイカダ、ミヤマタゴボウ、ヘツカコナスビ、カンザブドウノキ、マルバアオダモ、アケボノソウ、ヘツカリンドウ、オオルリソウ、イヌトウバナ（南限）、スズコウジュ、ケミヤマナミキ、マルバノホロシ、ナガバノハエドクソウ（南限）、タニワタリノキ、ツクシヤブウツギ、クサヤツデ、ヤナギアザミ（南限）、ハンカイソウ、ハバヤマボクチ（南限）、ハイチゴザサ、イヌアワ（南限）、ゴキダケ、ナルコスゲ、シバスゲ、ジングウスゲ、アブラガヤ、シライトソウ、ウバユリ、ツクサシユスラン、カシノキランなどが自生しています。



表 2.22 鹿児島県レッドデータブックに記載されている植物類

科名	種名	鹿児島県 RDB	環境省 RL
イノモトソウ	サツマハチジョウシダ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
ヒメシダ	クシノハシダ	準絶滅危惧	—
コウヤワラビ	イヌガンソク	準絶滅危惧	—
メシダ	カラクサイヌワラビ	絶滅危惧Ⅱ類	—
	ツクシイヌワラビ	準絶滅危惧	—
	ナンゴクシケチシダ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
オシダ	イワヘゴ	準絶滅危惧	—
	タカサゴシダ	準絶滅危惧	準絶滅危惧(NT)
	イヌタマシダ	準絶滅危惧	—
	タイワンジュウモンジシダ	準絶滅危惧	—
ウラボシ	ヤノネシダ	準絶滅危惧	—
ヒメウラボシ	オオクボシダ	準絶滅危惧	—
コショウ	サダソウ	準絶滅危惧	—
トチカガミ	スプタ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
シュロソウ	ツクシショウジョウバカマ	準絶滅危惧	—
ラン	タネガシマムヨウラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
	ムギラン	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧(NT)
	ミヤマムギラン	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧(NT)
	ダルマエビネ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
	エビネ	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧(NT)
	ヘツカラン	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類(CR)
	ナギラン	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
	オサラン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
	アケボノシュスラン	準絶滅危惧	—
	ベニシュスラン	絶滅危惧Ⅰ類	—
	ツリシュスラン	絶滅危惧Ⅱ類	—
	ヒメノヤガラ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
	ササバラン	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
	タカサゴサギソウ	絶滅危惧Ⅰ類	—
	オオバノトンボソウ	準絶滅危惧	—
	イイヌマムカゴ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
	ウチョウラン	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
クサスギカズラ	ヒュウガギボウシ	絶滅危惧Ⅱ類	—
	サイコクイワギボウシ	絶滅危惧Ⅰ類	—
	オモト	準絶滅危惧	—
ヤシ	ビロウ	準絶滅危惧	—
カヤツリグサ	アゼナルコ	準絶滅危惧	—
	ジングウスゲ	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧(NT)
キンポウゲ	タンナトリカブト	絶滅危惧Ⅰ類	—
	サラシナショウマ	絶滅危惧Ⅰ類	—
ユキノシタ	キレバチダケサシ	絶滅危惧Ⅱ類	—
	キレバチダケサシ	絶滅危惧Ⅱ類	—
	シコクチャルメルソウ	絶滅危惧Ⅱ類	—
マメ	ユクノキ	絶滅危惧Ⅱ類	—
クロウメモドキ	ナンゴクオオクマヤナギ	準絶滅危惧	—
イラクサ	タンナヤブマオ	準絶滅危惧	—
ブナ	イチイガシ	準絶滅危惧	—



科名	種名	鹿児島県 RDB	環境省 RL
ニシキギ	ヒゼンマユミ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
トウダイグサ	タカトウダイ	絶滅危惧Ⅱ類	—
カワゴケソウ	カワゴロモ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
	タシロカワゴケソウ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類(CR)
オトギリソウ	ハイオトギリ	準絶滅危惧	—
ノボタン	ヒメノボタン	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
ナデシコ	ヤクシマサワハコベ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
ツリフネソウ	ツリフネソウ	準絶滅危惧	—
サクラソウ	ミヤマタゴボウ	準絶滅危惧	—
	ヘツカコナスビ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類(CR)
ツツジ	イチヤクソウ	準絶滅危惧	—
	ハヤトミツバツツジ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠA類(CR)
	オオスミミツバツツジ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
リンドウ	ヘツカリンドウ	準絶滅危惧	—
キョウチクトウ	ナンゴクカモメヅル	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
ナス	マルバノホロシ	絶滅危惧Ⅰ類	—
ムラサキ	オオルリソウ	準絶滅危惧	—
ゴマノハグサ	オオヒナノウスツボ	絶滅危惧Ⅱ類	—
シソ	カイジンドウ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
	ヒメキセワタ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
	ホソバアキノタムラソウ	準絶滅危惧	—
	ミゾコウジュ	準絶滅危惧	準絶滅危惧(NT)
	コナミキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
	シソバツナミ	準絶滅危惧	—
	ケミヤマナミキ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
	ニガクサ	絶滅危惧Ⅱ類	—
セリ	ヒメノダケ	準絶滅危惧	—
アゼナ	コバナツルウリクサ	準絶滅危惧	—
ハマウツボ	シオガマガク	準絶滅危惧	—
	コシオガマ	準絶滅危惧	—
キク	ノマアザミ	準絶滅危惧	—
	クサヤツデ	準絶滅危惧	—
	ハンカイソウ	絶滅危惧Ⅱ類	—
	ハバヤマボクチ	絶滅危惧Ⅱ類	—
ハイコナハダ	ハイコナハダ	準絶滅危惧	準絶滅危惧(NT)

環境省 RL : 「レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物— (レッドリスト 2020 にて補遺)」  
(環境省)

鹿児島県版 RDB : 「改定・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物—鹿児島県レッドデータブック 2016—」  
(鹿児島県)

鹿児島県版 RDB の分布欄に、錦江町の地域に該当する種を抽出



図 2.18 植生図



※1/25,000 植生図「鹿児島県」GISデータ（環境省生物多様性センター）を使用し、作成・加工したものである。  
 (<http://gis.biodic.go.jp/webgis/index.html>)



### (3) 動物相

#### 1) 鳥類

日本の鳥類の生活は1年を通じてみると、繁殖期と非繁殖期からなり、その間に渡りを行う移動性のものと、周年定着性のものがあります。移動性のものには短距離の地域移動から長距離の渡りまであり、繁殖地と越冬地の年周期移動です。鳥を移動の観点からみると、渡り鳥（冬鳥・夏鳥・旅鳥）と留鳥（漂鳥・真留鳥・半留鳥）に区分されます。

大隅地区でみられる鳥類は、一年を通して生息する留鳥（カラスやスズメ等）と、春になれば繁殖のために北に渡っていく冬鳥（カモ類やツグミ等）や南から渡ってくる夏鳥（ツバメやワシタカ類等）、そして、秋になると越冬のために北から渡ってくる冬鳥（カモ類やツグミ等）や南に渡っていく夏鳥（ツバメやコアジサシ等）があります。大隅半島はワシタカ類の渡りでも有名であり、異常気象などによって迷鳥の飛来もよく話題に上る地域です。

大隅地区の鳥類に関する特性はワシタカ類の渡りが第一にあげられます。特に秋の10月から11月にかけての渡りのシーズンになると、日本列島を南下してきたワシタカ類は大隅半島を縦断し佐多岬上空を通過し南西諸島へと渡っていきます。大隅ブロック野鳥の会の岩元氏らによる長期間の観察例から、渡りでみられるワシタカ類はサシバ、ハチクマ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、ケアシノスリ、オオノスリ、ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ、オジロワシ、チュウヒ、ハイイロチュウヒ、アカハラダカ、カラフトワシ、ミサゴの17種があります。

最も多い種はサシバですが、渡りの時期に、サシバと行動を共にして混群として渡る種と、サシバ等の群に混じらず単独で渡っていくというような特性がみられます。サシバの群れに混じり行動する種は、ハチクマ、ツミ、ハイタカがあります。サシバの群に混じらず単独行動をとる種に、オオタカ、ノスリ類（ケアシノスリ、オオノスリ）、ハヤブサ類（ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ）があります。また、留鳥とされるミサゴも少数ですがこの時期に南下する個体がみられます。

大隅地区は太平洋に面していることもあり、台風や前線等の気象異常でグンカンドリ類やアジサシ類が飛来することもあります。1996年6月25日にヤマショウビンが観察されています。また、1996年には鹿屋市近隣でナベヅルの15羽の群飛行が観察され、一羽単位ですが別個体とおもわれるナベヅルが大隅地区の数箇所で見られました。

出典：鹿児島島の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館1997年）



表 2.23 鹿児島県レッドデータブックに記載されている鳥類

科名	種名	鹿児島県 RDB	環境省 RL
ウミスズメ	カンムリウミスズメ	情報不足	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
タカ	ハチクマ	準絶滅危惧	準絶滅危惧
ハヤブサ	ハヤブサ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
ウグイス	ウチヤマセンニュウ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類(EN)
タカ	サシバ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
ウグイス	イイジマムシクイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)

環境省 RL : 「レッドデータブック 2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー (レッドリスト 2020 にて補遺)」  
(環境省)

鹿児島県版 RDB : 「改定・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物ー鹿児島県レッドデータブック 2016ー」  
(鹿児島県)

※鹿児島県版 RDB から錦江町の地域に該当する種を抽出



## 2) 両生類・爬虫類

両生類・爬虫類はそれぞれの習性から、川の源流域の森林から平野部や耕作地、湖沼、河川などの環境を選び、それに適応しながら生きています。

両生類・爬虫類の中で大隅地区だけに生息するというような固有の種はなく、また、環境庁の編纂した「レッドデータブック」（日本の絶滅のおそれのある野生生物）の掲載種もありません。しかし、稲尾岳はブチサンショウウオの生息の南限です。肝属山塊に生息するサンショウウオは学者によっては種の分化が進んでいるとして、現在、検索の研究を進めているなど学術的な注目をあつめています。

日本の両生類・爬虫類の分布状況は哺乳類と似ていますが、移動能力や環境適応に限界があり、地域を限って生息・分布する種も多いです。

現在、大隅に生息するとされる両生類・爬虫類にはブチサンショウウオ、アカハライモリ、ニホンヒキガエル、アマガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、ニホンアカガエル、トノサマガエル、ヌマガエル、ウシガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエル、アカウミガメ、イシガメ、スッポン、ヤモリ、ニホントカゲ、カナヘビ、シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シロマダラ、ヒバカリ、ヤマカガシ、マムシの26種があげられます。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書IV 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997年）

オオスミサンショウウオは、大隅半島肝属山地の溪流だけに生息します。これまで紀伊半島などに生息するオオダイガハラサンショウウオと同種だと考えられていましたが、平成26年に独立種であることが判りました。脊椎動物の県本土固有種は、非常に貴重な存在だといえます。

出典：鹿児島県レッドデータブック 2016（鹿児島県）

表 2.24 鹿児島県レッドデータブックに記載されている両生類・爬虫類

科名	種名	鹿児島県 RDB	環境省 RL
イシガメ	ニホンイシガメ	準絶滅危惧	準絶滅危惧
サンショウウオ	オオスミサンショウウオ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU) (オオダイガハラサンショウウオとして)
アカガエル	トノサマガエル	準絶滅危惧	準絶滅危惧

環境省 RL：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－（レッドリスト 2020 にて補遺）」  
(環境省)

鹿児島県版 RDB：「改定・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物－鹿児島県レッドデータブック 2016－」  
(鹿児島県)

※鹿児島県版 RDB から錦江町の地域に該当する種を抽出



### 3) 哺乳類

哺乳類はそれぞれの習性から森林から平野部や耕作地などの環境を選び、それに適応しながら生きています。

哺乳類の中で大隅地区だけに生息するというような固有の種はなく、また、環境庁の編纂した「レッドデータブック」（日本の絶滅のおそれのある野生生物）の掲載種もありません。

日本の哺乳類の分布状況は両生類・爬虫類と似ていますが、移動能力や環境適応に限界があり、地域を限って生息・分布する種も多いです。哺乳類は種類数も少なく、生息数も少ないです。また、夜行性ということもあり、あまり目立たない存在です。稲尾岳はヤマネの生息の南限となっています。

現在、大隅に生息するとされる哺乳類にはジネズミ、ヒミズ、コウベモグラ、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、ノレンコウモリ、アブラコウモリ、ニホンユビナガコウモリ、ニホンザル、ノウサギ、ムササビ、ヤマネ、アカネズミ、ヒメネズミ、カヤネズミ、ハツカネズミ、クマネズミ、ドブネズミ、タヌキ、キツネ、テン、イタチ、アナグマ、ニホンイノシシ、ニホンジカがあげられます。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997年）

表 2.25 鹿児島県レッドデータブックに記載されている哺乳類

科名	種名	鹿児島県 RDB	環境省 RL
ヒナコウモリ	コテングコウモリ	絶滅危惧Ⅱ類	—
ネズミ	ヒメネズミ	絶滅危惧Ⅱ類	—
ヤマネ	ヤマネ	絶滅危惧Ⅰ類	—
ネズミ	スミスネズミ	絶滅危惧Ⅱ類	—

環境省 RL：「レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—（レッドリスト 2020 にて補遺）」  
（環境省）

鹿児島県版 RDB：「改定・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物—鹿児島県レッドデータブック 2016—」  
（鹿児島県）

※鹿児島県版 RDB から錦江町の地域に該当する種を抽出



#### 4) 昆虫類

本地域の大部分は笠野原台地を中心とする耕作地帯で、昆虫相としてはいわゆる人里昆虫を主体としていますが、西に高隈山、東に日南山地、南に肝属山地から佐多岬にかけての森林地帯があり、多くの森林性あるいは溪流性昆虫が生息しています。また、低地に点在する湖沼にも注目すべき昆虫が多いです。

大隅半島は生物地理学上の旧北区の南縁に近く、ここを南限とする種はきわめて多いです。それらはクロヒカゲ、ハルゼミなど人里に生息する普通種も多数含まれています。錦江町のオオカワトンボなどもそれに近い例かもしれません。肝属山地の森林や溪流にはムカシトンボ・スギタニルリシジミなど多くの貴重な種が残存し、シータテハやオオムラサキらしい個体も目撃されており確認が待たれます。また、高隈山のブナ帯にはオオチャイロハナムグリなど霧島山との共通種がいます。ただし、ここにはヤマキマダラヒカゲ、フジミドリシジミ、エゾハルゼミなどは発見されず、今後課題を残しています。また1989年の志布志市四浦でのシータテハの発見は日南山地（曾於郡を含む）の重要性を示唆しています。

ウルム氷期にこの一帯に踏みとどまった可能性をもつ照葉樹林は、その後の温暖化にともなって北上し、それとともに多くの南方系（ヒマラヤ型分布系・マレー型分布系）の昆虫が分布を広げたと考えられます。大隅地方には残存した古い時代のものと、新たに南方から到達したものが混在していると思われます。その識別は容易ではありませんが、クロイワツクツク、チビサナエ、ツマベニチョウ（日南に達する）など、分布北限種やそれに準ずるものがこの一帯を南方色豊かなものにしていきます。

肝属山地に屋久島との共通の特産種が生息しています。1990年屋久島特産種とされていたカミキリムシ2種の甫与志岳西部における発見は、その後にタマムシ2種の追加記録を生み、他の昆虫群にも大きな期待を持たせることになりました。

特産種としては、サタヒラタゴミムシなどを挙げられますが、調査精度が高いチョウやトンボ・セミ類では知られていません。いくつもの昆虫群で、この地域で採集された新種と目されるものは多数いますが、真に大隅半島の特産種かどうかは今後の調査を待つしかありません。ちなみに、稲尾岳の甲虫類は1985年7～9月の短期間の調査ですら227種が採集され、ここでの新記録種は168種、さらに新種と思われるもの20種がいたといわれます。高隈山などの高地帯に隔離されたものの中から特産種が発見されるであろうか。

大隅における昆虫相成立史の解明は、より詳細な調査と、各種火砕流を含む地史の検討など総合的な視野から進めなければなりません。今後は残された森林地帯のみならず、人工林のクヌギ林、川沿いの自然木（ハルニレなど）、茅場・牧場としての草地・笹原、河口付近の湖沼・湿地、古い湧水池・人工溜め池など、人々の生活と関わりの深い環境も重要な調査ポイントとなります。

出典：鹿児島島の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館1997年）



表 2.26 鹿児島県レッドデータブックに記載されている昆虫類

科名	種名	鹿児島県 RDB	環境省 RL
カワトンボ	ニホンカワトンボ	絶滅危惧Ⅱ類	—
トンボ	タバサナエ	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧(NT)
セセリチョウ	ミヤマセセリ	絶滅危惧Ⅱ類	—
	ギンイチモンジセセリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧(NT)
シジミチョウ	コツバメ	絶滅危惧Ⅱ類	—
	スギタニルリシジミ九州亜種	準絶滅危惧	—
	カラスシジミ	準絶滅危惧	—
	トラフシジミ	準絶滅危惧	—
タテハチョウ	ミドリヒョウモン	準絶滅危惧	—
ツトガ	カワゴケミズメイガ	準絶滅危惧	準絶滅危惧(NT)
ハンミョウ	アイヌハンミョウ	準絶滅危惧	準絶滅危惧(NT)
カミキリムシ	アカアシオオアカミキリ	準絶滅危惧	—
	ルリボシカミキリ	準絶滅危惧	—
クワガタムシ	オオクワガタ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
ガムシ	ガムシ	準絶滅危惧	準絶滅危惧(NT)
カミキリムシ	ルリボシカミキリ	準絶滅危惧	—
	コブバネゴマフカミキリ	準絶滅危惧	—
ツチバチ	ナガセクロツチバチ	準絶滅危惧	準絶滅危惧(NT)

環境省 RL：「レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—（レッドリスト 2020 にて補遺）」  
（環境省）

鹿児島県版 RDB：「改定・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物—鹿児島県レッドデータブック 2016—」  
（鹿児島県）

※鹿児島県版 RDB から錦江町の地域に該当する種を抽出



### 5) 魚介類

淡水域および汽水域を含めたいわゆる“陸水域”に生息する甲殻類は、おもにテナガエビ類、ヌマエビ類、ザリガニ類、サワガニ類、およびイワガニ類に属しています。鹿児島県の陸水産甲殻類に関する研究は瓜田（1921）に始まりますが、その研究では種名リストが上げられているだけで、その生息分布の詳細は報告されていません。その後、久保（1936）、上田（1970）、諸喜田（1975,1979）がエビ類の生息分布を、Minei（1973）がカニ類の生息分布調査を行いました。調査対象地域は種子島・屋久島以南の島々が主で、県本土では北薩地方がわずかに調査された程度です。

このように大隅地域は陸水産甲殻類研究の空白地域でしたが、最近になって調査研究がなされ、本地区の陸水産コエビ類（テナガエビ類とヌマエビ類の総称）相は薩摩半島のコエビ類相と類似しますが、薩摩半島より若干南方系種が多く分布することが明らかになりました。一方、純淡水産のサワガニ類相については、日本に広く分布するサワガニに加え、大隅半島固有種の生息が確認され、またサワガニにおける興味深い分布が明らかにされています。また、陸水産甲殻類相が近接する薩摩半島のそれと若干異なるのは、それぞれの半島の地史的形成過程が異なっていること、および各種生物の生活史の違いが、総合的に影響した結果と考えられます。生活史の中でも特に幼生の生活形や発育条件は大きく影響すると考えられます。

出典：鹿児島県の自然調査事業報告書Ⅳ 大隅の自然（鹿児島県立博物館 1997年）

表 2.27 鹿児島県レッドデータブックに記載されている汽水・淡水魚類・十脚甲殻類

科名	種名	鹿児島県 RDB	環境省 RL
メダカ	ミナミメダカ（大隅型）	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (メダカ南日本集団)
ハゼ	ルリヨシノボリ	準絶滅危惧	—

環境省 RL：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－（レッドリスト 2020 にて補遺）」  
(環境省)

鹿児島県版 RDB：「改定・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物－鹿児島県レッドデータブック 2016－」  
(鹿児島県)

※鹿児島県版 RDB から錦江町の地域に該当する種を抽出



ミカゲサワガニ（大原地域）  
【県：準絶滅危惧 国：準絶滅危惧(NT)】



ミナミメダカ（盤山地域）  
【県：準絶滅危惧 国：絶滅危惧Ⅱ類(VU)】

